SPF 笹川平和財団
SASAKAWA PEACE FOUNDATION

SPFアメリカ現状モニター

オバマ回顧録論

北海道大学　渡辺 将人

表紙・中表紙写真：著者所蔵、アメリカ選挙広報物

SPFアメリカ現状モニター

「オバマ回顧録論」

渡辺将人 北海道大学

北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院准教授

渡辺 将人

わたなべ まさひと

シカゴ大学大学院国際関係論修士課程修了。早稲田大学大学院政治学研究科にて博士（政治学）取得。コロンビア大学ウェザーヘッド研究所、ジョージワシントン大学シグールセンター、台湾国立政治大学社会科学学院政治学系・国際事務学院、ハーバード大学国際問題研究所にて客員研究員、訪問学者を歴任。専門はアメリカ政治・外交。米政治実務と独自の対米パイプを活かした分析に定評がある。2009年にインドネシアとアメリカ各地でオバマの親族、恩師、親友を取材したオバマ評伝が話題に。同書の増補改訂版『大統領の条件』（集英社文庫）、『メディアが動かすアメリカ』（ちくま新書）、『現代アメリカ選挙の変貌』（名古屋大学出版会、大平正芳記念賞）、『オバマ・アメリカ・世界』久保文明・中山俊宏との共著（NTT出版）のほか著訳書多数。

目　次

SPF「アメリカ現状モニター」とは　04

まえがき　05

第１章　アメリカ大統領回顧録とは　08

第２章　作家オバマの「文学作品」として　16

第３章　政治教育者としての「スピンドクター」　26

第４章　政権の「公式写真集」として　35

第５章　諸外国と「文化」言及のジレンマ　42

第６章　オバマにとっての北朝鮮と中国　50

第７章　トランプとバイデンについて　56

SPF「アメリカ現状モニター」とは

本プロジェクトでは、米国政治、外交、また広く米国社会の問題を専門とする日本人研究者グループが、米国の政治・社会動向や政策にフォーカスし、その変化・変動・そしてその多方面への影響に注目して、現状を調査分析（モニター）し、その情報を、「論考シリーズ」として、広く公開・発信しています。

2017年1月、米国でトランプ大統領が誕生したことにより、我々は、経済的格差の拡大、雇用問題などを背景とした、白人中間層に代表される怒りや不満、分断の存在、米国内部の社会の変容に本気で目を向けることとなりました。同時に、移民問題、外交、貿易などトランプ氏自身の数々の政策や言動がもたらす形で、世界の中での米国のプレゼンス（軍事力、信頼、その他の影響力等）の変化も予測されました。

このように変化する米国を前に、「我々は本当に米国を理解していたのか」という問いかけを土台に、今後の日米関係、対米関係を念頭に置きながら、米国を客観的に、俯瞰して眺めつつ専門的議論を行うことは、極めて重要となっています。こうした状況に対し、米国内に生じる変化を深く理解し、その行方を見極めるため、専門的見地を土台にした客観的で信頼できる調査や分析情報を発信・提供することを目的とし、民間の専門家によるプロジェクトとして、2017年11月に研究会がスタートしました。同月に最初の論考も公開し、2021年8月に100号を迎えました。

SPF「アメリカ現状モニター」ウエブサイト

https://www.spf.org/jpus-j/spf-america-monitor/

まえがき

オバマ回顧録『約束の地：大統領回顧録Ⅰ』上・下巻（集英社）[1]が2021年2月16日に日本で出版された（前年11月17日にアメリカでCrown社より出版された原書*A Promised Land*の全訳）。作家志望だった「文人オバマ」の回顧録にはかねて注目が集まっていたが、退任後4年近くの年月を経て漸く「前半」が姿を見せた。なぜバイデン政権の今、オバマを振り返るのか。往々にして現政権で見えないものは、前任者、前々任者との比較で可視化されることがある。本稿には3つの含意がある。

出版日当日、米国の書店に重ねられた*A Promised Land*※

第1に、バイデン政権の輪郭への手がかりだ。オバマは「医療保険大統領」「内政大統領」として、ホワイトハウスの振付師たちに方向付けられた。ビンラディン殺害も、9/11テロ犠牲者の鎮魂、「宿題」をやり残したブッシュ息子政権との差異化を意図した「内政」対応だった。だが、それ以後はドローン攻撃も駆使して、戦争を国民の目、すなわちメディア報道からは隠した。ビンラディン殺害は超党派で評価されたが、アフガニスタン撤退となると国論を割り、作戦上の混乱も避けられない。短期ではマイナスしかない仕事だ。バイデン政権はその「つけ」を引き継いだ。副大統領だったバイデンにはオ

1.『約束の地：大統領回顧録Ⅰ』上・下巻（山田文他訳、集英社、2021年）
※ Photo by ©Mark HertzbergZUMA Wire／共同通信イメージズ

バマ政権の責任もある。その意味で「オバマ時代のつけ」の意味は「トランプ時代のつけ」とは違う重みでのし掛かる。オバマは何をバイデンに残したのか。

また、バイデン政権の「中間層外交」は、2016年大統領選挙敗北の衝撃から生まれた民主党版「アメリカ・ファースト」でもあるが、「アメリカ・ファースト」の気運はティーパーティ運動、ウォール街占拠運動が進化したサンダース旋風など左右の双方のポピュリズムと連動している。ブラック・ライヴズ・マター（BLM）運動を含め影響力のある社会運動は、いずれもオバマ時代に誕生している。これらはバイデンの向かい風にも追い風にもなる。

第2に、トランプ前大統領の分析だ。トランプは異端の大統領だったが、オバマもそれに勝るとも劣らない異端の大統領だった。ただトランプは異端であることを誇り、オバマは異端性を隠し通した。両者にはオバマがトランプを生んだという政権をまたぐ因果関係を越えた、ある種の「見事な対称性と非対称性」が存在する[2]。オバマは回顧録に幼少期や青少年期のことを詳述していない。また一部の記述は青春期の親友を悲しませた。「書かれなかったこと」に逆説的に滲むものとはなにか。トランプがオバマの弁慶の泣き所と考えて執拗に攻撃した「外国人性」がなぜアメリカの大統領としては「禁断」なのか。筆者がオバマ評伝を取材する過程で世話になった、インドネシア、ハワイ、カリフォルニア、ニューヨークに点在するオバマの元親友に加え、シカゴやワシントンのオバマの元部下にも、広く回顧録の読後感を聞いてみた。前半生が欠落した回顧録の謎解きは、オバマと一対の鏡像をなすトランプ理解の鍵でもある。

第3に、「回顧録」というアメリカ政治家本へのリテラシーの共有だ。筆者が2009年から日本経済新聞で不定期に担当している書評では翻訳書を扱わせていただくことが多い。ビジネス書から著名人の伝記まで海外の書物には出版国の独特の文化が滲む。とりわけ本人が記す回顧録と第三者が描く評伝の価値の違いは要注意である。政治家の書籍は、出版の時期や体裁により

2. 筆者のオバマ論について交わされた空井護・北海道大学大学院公共政策学連携研究部教授との対話における、空井教授の指摘より（2021年9月）。
3.『私たちの真実―アメリカン・ジャーニー』（藤田美菜子、安藤貴子訳、光文社、2021年）
4. バイデンは大統領選挙中にも就任前後にも邦訳が出ない異例の大統領だったが、息子への追悼書である自著邦訳『約束してくれないか、父さん：希望、苦難、そして決意の日々』（長尾莉沙他訳、早川書房、2021年）が満を持して本年9月に刊行された。

けりだが、それ自体が常に広報戦略の一部である。本連載中にもカマラ・ハリス副大統領の自著の翻訳書が日本で刊行されている[3]。現職副大統領の自著邦訳は稀な上に、当時はバイデン大統領の自著未邦訳の中での先行邦訳だった[4]。今後刊行されるトランプ回顧録、オバマ回顧録「後編」を吟味する上でも、このオバマ回顧録の何が特殊なのかを浮き彫りにしておきたい。

「アメリカ現状モニター」のメンバーは、アメリカについてプロジェクトの内外で専門的に著作や論文を著してきた。オバマ政権についても例外ではなく、顧問の久保文明教授、メンバーの中山俊宏教授、渡辺がプロジェクト始動5年前に鼎談と論考をまとめた共著『オバマ・アメリカ・世界』（NTT出版、2012年）から早くも10年近くが経過した。本プロジェクトのシリーズではオバマに焦点を絞った論考が未刊行だった中で、本稿はオバマについて研究会で交わされた討論を下敷きとしたオバマ論のアップデートの一部でもある。

渡辺将人（北海道大学）

＊本稿はプロジェクトの論考シリーズ100回記念に際して、保存版として7回の論考（2021年4月12日～6月11日）を1本化して再録したもので、各章はウェブ掲載時から基本的には加筆修正を加えていません。不適切な箇所があればご教示いただければ嬉しく存じます。また、紙幅の関係で本「回顧録論」には盛り込めなかったハリス副大統領論、オバマの前半生を彩る写真については『大統領の条件』（集英社文庫、2021年）をご笑覧いただければ幸甚です。

第１章

アメリカ大統領回顧録とは

アメリカ大統領回顧録とは

大統領回顧録を「政権」振り返りの記録と定義するならば、大統領ではなかった時期についての自著は、大統領回顧録とは別種の「元大統領による自著」と分類される。また大統領時代の本人の日記や覚え書きを歴史家や第三者が発掘して編纂したものは貴重な史料ではあるが、本人の単著としての大統領回顧録とは別のものとして捉えられることが多い。本人の手により同時代に発表された回顧録は第 15 代のジェームズ・ブキャナンまで遡る必要がある。それ以後は第 26 代セオドア･ローズベルト、第 30 代カルヴィン･クーリッジなどが大統領回顧録を著しているが、慣習として定着したのは意外と最近である。第 31 代ハーバート・フーバー以降は在職中に他界したケースを除いて、ほぼ全員が退任後に回顧録を出版している（後述するようにブッシュ（父）は変則型であった)。

アメリカ大統領回顧録の受け止められ方はアメリカ国内外では違う。言うまでもなくアメリカでは読者は「有権者」でもあるからだ。分極化時代の大統領回顧録は「党派本」の性質を背負わされる。オバマは政治家、しかも民主党の元大統領だ。アメリカ人は党派的な理由から絶賛と酷評をネットで繰り広げる。それは書籍鑑賞を超越した政治的行為であり、トランプ政権直後の今、同書への賛否は政治的態度と深く紐づいている。共和党は回顧録で改めてオバマが神格化されて政策が正当化されては困るし、民主党はオバマ回顧録に失敗してもらっては困る。オバマ政権への賛否が再燃すると、副大統領だったバイデンも一蓮托生で巻き込まれる。古傷が痛むかもしれない。アメリカ国内の感想は回顧録の内容自体に即したものとは限らない。未読、未購入のまま賛否の判断を下す傾向もある。オバマファンには購入しても飾っておくだけの人も少なくない。試しに筆者がオバマ評伝取材でインタビューして以来親しくしている 2 名のオバマの学友に訊くと、一人はオーディオブックまで聴き込んでいたが（英語版はオバマ本人の朗読も発売)、もう一人は「分厚いから読んでいない」とあけすけに「積読」を告白した。一人で数冊買った黒人の知人もいる。彼も未読破だ。アメリカでの熱狂と酷評はあ

くまでアメリカにおける分極化時代の「政治現象」として引いて見ておく必要がある。この本の原書の売れ行きは、2008年のオバマブームともミシェル夫人の自著の人気とも性質が違う。

さて、ではアメリカ大統領回顧録とはどのようなものか。研究者や記者による聞き書きのオーラルヒストリーとして出版されることが多い日本の総理大臣の回顧録と違って、現代のアメリカ大統領の回顧録は元大統領による単著という体裁で出版される。しかし、このことは編纂も個人で行われていることを意味しない。政策的な事実関係に関しては当時の政策スタッフの記憶に頼る必要があるし、争点の好き嫌いで記述のバランスを崩さないような配慮も必要だ。ゆえにスピーチライターを含むチームが支える。

聞き書き式の回顧録では、咄嗟の質問への反応にも意味があるし、第三者の目線から記憶を掘り起こす価値があるが、アメリカ大統領の回顧録はテーマ設定からして徹頭徹尾、元大統領目線である。触れたくないことには触れない。無論、触れなかったことが反発も招くのでそれもリスクのうちだ。いずれにせよ、政権自体の歴史的ブランディングを大統領周辺で一致団結して行う作業である。歴史家やジャーナリストなど外部目線による賛否双方からの評価ではなく、あくまで自画自賛も反省も含む自己評価である。大統領回顧録だけで特定の政権期の歴史解釈を行うことが難しいのは、特定政党の政治家が側近と作成した叙述には主観や穴もあるからだ。元大統領は歴史家ではない。任期終了の瞬間、過去の党派性や承認欲求を失うわけではない。

大統領回顧録の価値は、第1に当事者でしか知り得ない内部の事実関係、第2に元大統領が自分の政権がどう記憶されたいと願っているか、すなわち歴史自己ブランディングをめぐる願望の表象にある。大統領はジャーナリストや政策専門家ではない。偏りを自明のものとした上で、指導者の感情を味わう姿勢で読めば、無味乾燥な出来事の羅列の行間に個性が見えてくる。

回顧録を定義する要素①：出版時期

大統領回顧録の性質を定義する重要な要素が2点ある。第1に回顧録の出版時期、第2に元大統領の回顧録以前の書籍の出版歴である。

まず、1点目である。回顧録の多くは退任後2年から3年のうち、つまり

次の政権のうちには刊行される。カーター、レーガンなどは退任翌年に出版した。４年近くかかったのはニクソン、クリントン、オバマ（１巻目）の３名だ。ニクソンはウォーターゲート事件による辞任、クリントンは弾劾裁判にかけられた点で、世論の赦しを得るまでに一定期間を置く必要性を共通して抱えていた。クリントンは後述するように近年の大統領には珍しく回顧録以前に自著がなかったので、生い立ちから書き込む上で執筆時間を要したという理由もある。

ニクソンやクリントンのような理由がないことを考えるとオバマ回顧録の刊行の遅さは例外的だ。しかも今回刊行された『約束の地』は全２巻の１巻目である（原書１冊を邦訳は上下巻に分けているので、２巻目も同じ分量だと邦訳は４冊シリーズになる）。回顧録刊行は始まったばかりで、まだ終了していない。トランプが１期で終わったことで回顧録「完結」が後続２つの政権にまたがってしまった。もたもたしているとトランプ回顧録が先に出てしまい、刊行と政権順が入れ替わってしまう。だがオバマは大統領の「平凡」な回顧録との差異化を意識している気配がある。次回以降見るように、オバマは制約の範囲内で回顧録に独特の個性を反映させている。

しかし、回顧録が概ね次の政権の間に出ることにはそれなりに理由がある。刊行が先延ばしになればなるほど、後続政権との相対評価や世論からの影響を受ける。後任が自分の党の大統領であろうとなかろうと、後任との比較に惑わされずに自政権を淡々と振り返って記録し、世に出すには、なるべく早期がいい。記憶も新鮮なうちに、政権を終えた時の心残りも含め、フレッシュな政権回顧を切り取ることには意味がある。

無論、後続政権との関係は「出しやすさ」を左右する。回顧録はメディアが記事にする。インタビュー取材も入るし、講演依頼も来る。同じ本の内容でも、原稿がメディアに回覧された段階での世論の風向きのほか、後任がどの程度まで活躍しているか（ライバル目線からは「活躍してしまっているか」）、低評価を受けているかで、回顧録の初期的な評価が影響を受ける。再選できず１期で終わった大統領と堂々の２期満了元大統領では自己弁護の焦点も異なる。

身内の政党の妨害になることもある。クリントンとオバマはいずれも後任大統領の再選選挙年に刊行している。だが、クリントンがブッシュ（子）再

選が不透明な6月段階で刊行したのに対し、オバマは11月の大統領選挙後に刊行した。良くも悪くも人間味豊かで一度でも握手した人を虜にした「人たらし」のクリントンの回顧録は話題沸騰となり、2004年に出馬していたジョン・ケリーをいっそう堅物に見せた。ブッシュ（子）攻撃の効果はなかったが、ケリーの足を引っ張った。オバマ回顧録の刊行タイミングは、選挙への影響は与えずに、しかし再選をめぐる結果が出た段階での「時代の一区切り感」に上手に便乗した。民主党層は（不正選挙問題は起きたものの）トランプ時代の終焉のベルを聴いたのと同時にオバマ回顧録を手にした。トランプ再選の場合は違う受け止められ方になっていたはずだ。

いずれにせよ、出版時期を先延ばしにすると、後続の政権の動きが気になり、加筆修正したい部分がエンドレスに湧き出てくる。また、政権記録ではない別の書物になってしまう問題もある。後続の政権との比較で自己評価をするという同時代進行系の政治評論だ。オバマ回顧録はトランプとバイデンとの相対評価で読まれる本に否応なしになっていく。トランプ時代ではなくバイデン時代に読まれる本になったことは、オバマにとっては「現時点では」幸運であった。ただ、バイデン政権の中でもとくに同じ人種マイノリティでバイレイシャルという点でオバマと共通性があるカマラ・ハリス副大統領の活躍が鮮烈な華やかさを伴った場合は、「相対評価」の観点では2巻目をじらすオバマ戦略が吉と出るかはまだ読めない。

大統領回顧録は、かつては存在しなかったものだし正式な職務ではない。定められた締め切りもない。回顧録を出さないのも自由ではある。しかし、回顧録が慣習化していなかった時期のアメリカや世界情勢と現在は違う。衰えを見せているとはいえアメリカは世界に多大な責任を負っている。その国の大統領が主要な自らの政治判断について、機密に抵触しない範囲で明らかにしておくことは、おまけの「宿題」などではなく、自身の財団や講演活動などよりも退任後に最優先でやってほしい仕事だ。その意味で、極端に刊行時期を引っ張ることに関しては、賛否があるだろう。

回顧録が後続の政治的な影響を受けてしまう弊害以外にもう1つ重要な問題がある。縁起でもないことではあるが、元大統領がいつまで無病息災で長寿かは誰にもわからないということだ。第二次世界大戦期以降の大統領では、在職中に病に倒れたフランクリン・ローズベルト、暗殺されたケネディの回顧録がない。心身ともに意気軒昂なうちにある程度の完成度で切り上げて世

に出しておくことは、大統領の最後の務めであり、歴史の記録という重大な公務でもある。オバマ回顧録の１巻目（邦訳の下巻）は政権１期目の半ば、ビン・ラディン殺害で終わっている。慎重なオバマのことだ。草稿は最後まで書きあげた上で、刊行時期の吟味と細部を磨く編集作業をしているだけだと願いたい。

回顧録を定義する要素②：回顧録以前の自著歴

第２に、回顧録を読む場合に重要な前提条件となるのは、その大統領が過去にどのような著作物を出しているかだ。

元大統領の自著には政権記録以外、大統領期以外の自分の人生について回顧する本もある。これは広義の「大統領回顧録」と見ることもできるが、大統領退任後の本であることが条件だ。大統領になる前に出版された本は、その後大統領になる人の本であって、大統領の政権記録ではない。しかし、この大統領になる前に出された本が回顧録に影響を与える。大統領選挙に参戦する政治家は、連邦レベルの檜舞台に打って出る直前に「自己紹介本」すなわち「キャンペーン本」を出版する。その本の中で生い立ち、政治を志した所信表明、そしてざっくりとしたマニフェストが明かされる。この「キャンペーン本」の有無と内容が、実は回顧録に多大な影響を与える。回顧録研究は「キャンペーン本」とセットで行われなければならない。「キャンペーン本」で述べていることを元大統領はあえて「回顧録」では繰り返さない傾向がある。「キャンペーン本」を出していない元大統領は回顧録にそれを遅ればせで持ち込むので、回顧録の「政権記録」としての性質が歪みがちだ。

つまり回顧録は「キャンペーン本」が既に読まれていることから逆算して原稿が構成される。「キャンペーン本」はすべてが海外翻訳されているわけではないのに、広く海外で翻訳される回顧録の構成が「キャンペーン本」に左右されている。これは回顧録が結局のところはアメリカ国内政治の発想で作られていることを意味している。アメリカでは政治家の本の読者は「有権者」と同義である。読者は、政権の政策への賛否一つとっても、多くの場合「キャンペーン本」を通して元大統領の家庭環境などの生い立ち、政治への動機、軍歴や地域活動経験、信仰をめぐる態度などを知り、人物評価に関するエトス全般から採点を行う。だが、「キャンペーン本」が未訳の国では、読者は回顧録を突然読まされる。すると特定の大統領への印象や評価まで、

アメリカ国内とは無視できないズレが生じることがある。

近年の大統領回顧録

カーターは回顧録 *Keeping Faith*（邦訳『カーター回顧録：平和への闘い』）で生い立ちを書いていないが、それは *Why Not the Best?: The First Fifty Years* という「キャンペーン本」を 1976 年の大統領選挙直前（1975 年 12 月）に出版しているからだ。回顧録では選挙戦の振り返りすらなく、突然、組閣、そして議会との関係など実務的な大統領の仕事の記録に入る。その内容も大半が外交であるのがいかにも冷戦期を象徴する。

ブッシュ（子）の回顧録 *Decision Points*（邦訳『決断のとき 上・下』）は禁酒経験から始まる。ただ、個人的な物語としては目新しいものではない。学生時代の記述はあっさりしていて表面的だ。父親との関係に関する記述が多く、ワシントン暮らしをしても政治に関心が持てないと吐露する。政治の家に生まれなければ大統領を目指さなかったことがわかる興味深い記述が多いものの、ボリュームも少なくあっさりした回顧録だ。これはやはり「キャンペーン本」が存在するからだ。彼は 2000 大統領選直前の 1999 年に *A Charge to Keep*（邦訳『ジョージ・ブッシュ 私はアメリカを変える』）を著している。

クリントンは「キャンペーン本」を出していないため、回顧録 *My Life*（邦訳『マイライフ：クリントンの回想：アメリカンドリーム』）における 4 分の 1 を生い立ちと学生時代など若い頃に費やしている（邦訳の上巻の前半に相当）。オバマと同様に「物語」を持つ大統領としては自然だが、回顧録に放り込んだところがクリントン風で、政権記録というよりも人生録になっている。「キャンペーン本」との合体型の回顧録という点ではオリジナルだった。

レーガンはカリフォルニア州知事選に出る前の 1965 年に「キャンペーン本」で生い立ちを既に語り、大統領退任直後 1990 年に大統領回顧録 *An American Life*（邦訳『わがアメリカンドリーム：レーガン回想録』）も出している。

意外なのはブッシュ（父）で、1987 年に「キャンペーン本」に相当する *Looking Forward* を出しているが、退任後に大統領回顧録という形では出

版をしていない。1998年にスコウクロフト元国家安全保障担当補佐官との共著で*A World Transformed*を刊行したが、これは外交限定の回想だ。ブッシュ（父）自身の手による文章は1999年に*All the Best*という書籍にもまとめられているが、手紙や覚え書きを編集したもので他の大統領と同じような体裁の「大統領回顧録」ではない。

オバマはさらに特殊だ。「キャンペーン本」である*The Audacity of Hope*（邦訳『合衆国再生』）以前、*Dreams from My Father: A Story of Race and Inheritance*（邦訳『マイドリーム：バラク・オバマ自伝』）を出しているからだ。前者は2006年の連邦上院議員時代に出されたが、後者は1995年刊行で当時はシカゴ大学講師（教授待遇）として憲法学を講じていた時代で、草稿はコミュニティ・オーガナイザー時代から構想されていた。刊行翌年に州議会議員への道が開けたので、結果論としては「キャンペーン本」の効果も持ったが、当時は政治家ではなかったのでマニフェスト本ではない。政治とは無関係な「作家オバマ」による作品である。

日本では大統領候補として著名になってから邦訳されたので「オバマ自伝」との副題も付いているが（原題は「父から授かった夢の数々：人種と遺産をめぐるある物語」）、実はこの本は厳密には「自伝」ではない。これはジャーナリストのデイビッド・レムニックも述べているようにオバマ本人も隠していない。ただ一般的にはアメリカでも自伝と思われることがかつては多かった。筆者もオバマ評伝の取材過程でオバマの文学仲間から詳細を知らされた。

大学時代からオーガナイザー時代にかけて本気で作家を目指していたオバマがのめり込んでいたのは小説や詩の創作で、ルームメイトも短篇を競作する作家仲間だった。彼らが筆者とのインタビューで明かしているように*Dreams from My Father*は厳密には「リテラリー・バイオグラフィー」という文学ジャンルで、実在の人物や出来事をモチーフにそれらを混ぜ合わせて作者の人生を物語として再構築する小説だ。オバマも何人かの実在の友人を一つのキャラクターに結晶させている。登場人物の名前も創作が少なくなく、時系列も正確ではない。テーマもあえて人種論に絞っているので、父方の「アフリカ」の視点の本で、母方の話は意図的に抑制されている（シカゴ大学の教職を得る際に大学との話では「黒人の投票権についての本を書く」という話だったが、いつしか自伝風小説になった）。アメリカの書店では、オバマが議員になった後も「政治家の自伝」ではなく「アフリカ系文化」の

コーナーにひっそりと置かれていた。このことが今回のオバマ回顧録にも影響を与えている。次回以降、オバマ回顧録をトランプとバイデンへの言及にも目配りしながら、文章と内容の両面で検討していく。

第２章

作家オバマの「文学作品」として

オバマ回顧録論の２回目は、本書に漂う文学的性格の起源について考察する。

スピーチライター任せにできない本音の滲ませ方

本書にはオバマ元大統領本人にしか書けないか、少なくとも本人の許可がないと踏み込めない際どい記述が多数盛り込まれている。それが魅力の一つとなっている。ゴーストライターの関与度の判別ポイントは書籍のジャンルで多様だが、共通しているのは２点だ。構成と文章である。

資料や短時間の口述インタビューだけで、第三者がゴーストとして書く場合、過去の著作や演説から引用や繰り返しが増え、エピソード選びも無駄のない整然とした構成になりがちだ。『約束の地』は、わりと構成が「でこぼこ」している。そもそも前編・後編シリーズの時間差刊行で、前編を１期目の途中で中途半端に区切ることからして異例だ。前半生の記述の薄さの反面、選挙戦を詳細に扱う比重など、内容からもオバマ個人の思惑が浮き彫りになる。

そして、美しく個性的な文章だ。オバマ回顧録は、無味乾燥な記録とは一線を画した筆致に満ちている。過剰に詩的で感傷的なわけではない。しかし、一つひとつのシーン描写に遊び心を持ち込んだ独特のメタファーが満載である。スピーチライターの権限だけでは不可能な、オバマの印象に悪影響を与えかねない、超大国の責任者としては少し「傍観者」過ぎと思われかねない表現にも及んでいる（原書の英語もぜひ機会があれば目にしていただきたいが、翻訳の日本語も、読みやすさとオバマの文章の個性の再現の両立に成功している。なお、鳩山元総理をめぐる記述も話題になった翻訳問題については次回以降で言及する。以下、引用箇所の頁数は原書ではなく邦訳の頁）。首脳会議の集合写真やセレモニーの揶揄は印象的だ（下巻６-７頁）。

「首脳全員がずらりと整列してぎこちない笑顔を浮かべる、小学校３年生のクラス写真によく似たあれだ」

「ひたすら自席で時差ぼけと戦いながら、自分を含めた円卓の面々が議題を問わず入念に用意された原稿に沿って代わる代わる味気ない発言をしているあいだ、いかにも熱心そうな顔つきを必死で保つことになる」

「会議に書類仕事や何か読むものを持ち込んだり、誰かがマイクに向かっているあいだに他の首脳にそっと声をかけてちょっとした職務上の話をしたり」

プラグマティストのオバマは「無駄」が嫌いだった。特に形式を重視する外交の儀典礼を冷めた目線で捉えていた。会談や会議は事前に事務方同士でサブスタンスの多くを詰め終えている。発言要領に沿うことがオバマには退屈だった。とりわけ２者会談で常用される逐次通訳を時間の無駄として感じていた。首脳会談では双方の国が通訳者を用意するが、正確なニュアンスを重視する必要上あえて同時通訳を避ける。しかし、逐次には２倍の時間がかかる。30 分なら首脳の実際の発言は 15 分しかない。理由がある外交の慣習なのだが、オバマはそれを「無駄」と考えて改善を望んだ最初のアメリカ大統領だった（結局は外交の慣習に従った）。デバイスの普及と政権期間が重なったこともあるが、ブラックベリーやスマートフォンによる「内職」に寛容な大統領でもあった。現代的と言えば現代的、効率重視のビジネスマン的な人物だった。

このことは回顧録に書かれているわけではなく、筆者が複数の日米関係筋から聞き及んでいる話だ。だからこそ、上の鉤かっこで引用した部分（邦訳下巻冒頭）を読んで、これぞ「オバマ節」だと確信した。筆者にとってオバマ回顧録は「答え合わせ」の様な経験でもあったが、案の定、多国間のサミットを記念撮影以上の価値がない場と考えていたとの誤解を与えかねない描写も繰り出されて興味深い。ここは意外にもトランプ元大統領と共通する点でもある。

多くの実務家は、日常として内在化されている自分の職業風景には興味を持たない。首脳会談の様子を「内職」の技術まで茶化してあれこれ記述するのは、明らかにジャーナリストや作家の目線だ。ワシントンや外交エリート

たちの振る舞いを遠目で観察する「アウトサイダー」であり、部外者感が溢れているとも言える。

「等身大の大統領一家」描写と外交儀礼の狭間

見栄を張らない正直な描写は面白いが、相手国に失礼にならないかとこちらが心配になるシーンもある。ブラジル訪問時のオバマ一家の逸話は特に目を引く。リオデジャネイロでオバマ夫妻と娘２名を乗せた大統領専用ヘリコプター「マリーンワン」が巨大なキリスト像のあるコルコバードの丘上空にさしかかった際、オバマは娘２名に体を寄せながら指差して「ほら・・・・あそこに今夜行くんだよ」（下巻 474 頁）と言うのだが、家族が一切関心を持たない。

「だが２人の娘は iPod を聴きながら、ミシェルが持ってきた雑誌をぱらぱらとめくり、私の知らない晴れやかな有名人の写真を目で追っているだけだ。２人の注意を引こうと手を振ると、２人はようやくイヤホンを外して、同じように窓のほうへ顔を向けた。しかし、私のきげんをとるかのように一瞬そこに目をとめ、黙ってうなずくと、また耳にイヤホンを詰め込んでしまった。ミシェルはやはり iPod を聴きながらうたた寝しているらしく、何も言ってくれない」

「私は、２人のそれほど興味のなさそうなようすを見て、少々心を傷つけられた」（下巻 474 頁）

この家族内の会話は南米外交にも政策にも関係ない。しかし、筆者はとても正直で面白い箇所だと感じた。外交では訪問国に最高の敬意を払うし、テレビは大統領や首相、王族が現地国の文化に魅了されている姿を映す。オバマ本人も「訪れた場所の歴史や文化、人々に対する興味を示すようにした」（下巻 178 頁）と述べ、報道されるような観光を外交日程に組み込むことに大統領自ら気を配った。イラク戦争後、「傲慢なアメリカ」の修正を担わされた彼らしい。だが、家族はそうはいかない。

また、人種マイノリティ内での経済格差、教育格差にもオバマは正直な筆運びをする。オバマは自分の娘たちにはアファーマティブアクション（積極的差別是正措置）は不要だと早期から発言し、人種格差を軽視する「脱人種」

的にすぎると黒人指導者から誤解を受けてきた。オバマは経済的に恵まれている娘たちが黒人だからと優遇を受ける必要はないと考えていただけだが、ニュアンスを間違えると人種政治的にはリスクがあった。

オバマは外遊先で自国の音楽とゴシップ雑誌で時間潰しをする自分の妻と娘をダシにする「家族自虐」という手法で、セレブリティ家庭の自然体の日常とアメリカの「内向き」を表現することに見事に成功している。パパの仕事のせいでホワイトハウスの自室からそのままどこか知らない国に「連れてこられた感」がよくでている。カメラに映っていない時間の正直な描写だ。四六時中、相手国の言語や伝統工芸の予習をしているほうが偽善的だ。世界の文化に均等に関心があるはずもない。海外に関心がないことだってあり得る。

ミシェル夫人は長旅で疲れていただけかもしれない。しかし、「象徴的な建造物よ。しっかり見なさい」と国務省のレクチャーのようなことを言わないのも、夫に同調して娘をたしなめないのも、ある種ミシェルらしいし、リアリティがある夫婦のやりとりだ。王族のいないアメリカでは大統領一家は神格化されがちだ。彼らを俗物に見せかねないこうしたエピソードは、部下のライターの権限では盛り込めない。オバマ本人の手によるものだ。そもそもブラジルに失礼だ。国務省の南米担当は嫌がるにきまっている。

これが日本の例えば京都上空だったらと想像するとわかりやすい。「ほら、あれが大文字焼きだよ。むかし、ここに都があったんだよ」と話しかけても、iPod のイヤホンを外さずジャスティン・ビーバーを眺めていたとでも回顧録に書かれようものなら、日本のオバマのアンチとファンの増減になんらかの影響を与えたかもしれない。外交的にはアウトであることは自明だ。退任後も影響力に責任がある元大統領は、何でも自由に書いてもよいのかには議論がある。無責任に見える向きもあるだろう。だが、回顧録にこうした本音を散りばめるのは面白い細工で、等身大の大統領一家の空気感を醸し出す、元大統領にしか書けない文章だ。これは「大統領回顧録とは何か」と、元大統領に表現の自由がどこまで無制限に認められるのか、とに絡む問題でもある。

『約束の地』には、こういう政権の政策そのものと無関係な描写が散見される。そこにオバマが行間に滲ませたがっているメッセージが透ける。オバ

マにとって回顧録は明らかにただの「政権記録」ではない。「作家が大統領職を体験取材した」かのようなこの独特の空気感は一読の価値がある。オバマは見栄っ張りでええカッコしいと思われがちだ。今でもそういうエリート的な雰囲気は抜けていないが、文章表現においては「自虐」で自分や身内をピエロ化する技を駆使する余裕を見せている。

「作家オバマ」が抑制された３つの理由

コミュニティ・オーガナイザー出身の政治家にはしては、文章やレトリックにやたら凝っていると思われるかもしれない。日本語の翻訳でもそれは十分に味わえる。だが、それもそのはずで、オバマは作家だからだ。「作家志望だった文学青年」というよりも、「作品を発表して一度デビュー」したが違う道に進んだ「元作家」と言ったほうが正確だ。オバマの文章を読む際に、「読み方」を変えてしまいかねない情報であると同時に、期待値をむやみに高める先入観にもなる。しかし、この経歴を避けてオバマの文章を吟味するのは、むしろ不誠実になるだろう。そんな経歴聞いたことがない、と思われるかもしれない。たしかに今回の回顧録『約束の地』にもそのことはほとんど書かれていない。私たちが「作家オバマ」の顔にさほど馴染みがないのは、オバマ大統領の略歴上、明らかに情報の抑制を余儀なくされてきたからだ。その理由は大別して３つある。

第１に、元作家ないしは作家志望の元文学青年という経歴が、超大国の指導者にして最高司令官としては望ましくなかったことだ。元軍人や法律家が、繊細な芸術家的な才能もたまたま持ち合わせていて後年それを発揮したというのとはわけが違う。オバマのどこか白黒つけない、優柔不断にも見える、真理を求め、なんでも物事の両面を見て大所高所から傍観者的に観察する感覚は、作家としては素晴らしい才能だが、リーダーシップと決断が仕事の大国の指導者には向かないかもしれない。慶應義塾大学の中山俊宏教授は、回顧録の読後感として「ドストエフスキーの『地下室の手記』風に絶えず自分に問いかけ、信念を持ちつつ疑い続けるオバマの気質」が伝わってくると語り、「おそらくこういう人は大統領には向いてないんだろう」とも指摘した。実に言い得て妙である。だからこそオバマ側近たちは政治家オバマのブランディングに「文学」が表面化しないように細心の注意を払ってきた。

---

1. 渡辺将人『評伝 バラク・オバマ「越境」する大統領』（集英社、2009 年）および近刊『大統領の条件』（集英社、2021 年）

白人と留学生との交流と文学：オクシデンタル・カレッジ

第2に、オバマが進学したオクシデンタル・カレッジという大学での活動や交友関係が、作家オバマの核心だったことだ。オバマの学歴で有名なのはハーバード大学ロースクールだ。3年からコロンビア大学に編入する前に通っていたロサンゼルス郊外のオクシデンタル・カレッジはよく知られているわけではない。しかし、拙著『評伝バラク・オバマ』[1]で描いたように、オバマが演説や文章の決定的な才能の開花を経験したのは大学時代だった。オバマはもともと創作への関心と素養があり、ハワイのプナホスクール時代に優れた詩を校内雑誌に掲載している。大学で彼が選んだサークル活動は文芸の会だった。趣味のバスケットボールをやめたわけではないが、大学では小説や詩の創作に没頭した。そしてオバマは文学仲間と一緒にニューヨークに進出する。

2008年大統領選挙前後、コロンビア大学時代のオバマを覚えている学友がほとんどいないことが陰謀論的に論じられたことがある。それは彼が大学では最低限の授業に出る以外は、新規の交友を拡大せず、西海岸から共に越してきた仲間と文学に没入していたからだ。日本でもそうだが、大学は低学年時代にできる友人が核になる。オバマもコロンビア大学で新しい友達を作るよりも、オクシデンタル時代の仲間と4年間付き合いを継続した。オバマの大学生活はサークル活動と交友関係上は4年間ずっと「オクシデンタル時代」であった。コロンビア大学の同年卒業生に聞き取りをして足跡が出てこないのは当然だ。

アメリカでは入学や中退は学歴にならず、学位だけが履歴書に記される。知名度があるコロンビア大学とハーバード・ロースクールが、政治家オバマのブランディングとしては優先され、人間オバマの核心を形成したオクシデンタルは容赦無く抑制された。今回の回顧録でもオクシデンタル時代の知的営みについては、女性の気を引くことばかりに関心があったような自虐的な謙遜表現に終始している。しかし、オバマに文章創作の場を与え、競作や批評会を通じて、オバマの才能を開花させたのは、まぎれもなく同カレッジ時代の文学サークルだった。オバマが自分で筆を入れた過去の演説草稿を研究する上でも、当時の文学仲間への取材は必須だが、そこに関心を及ばせた米メディアは僅かだった。それはオクシデンタル時代の文学仲間が、ほとんど白人と外国人留学生だったことに起因する。

オバマはハワイ、インドネシア時代は、人種アイデンティティとしては「無人種」に近かった。白人のシングルマザー、インドネシア人の継父と異父妹、白人の祖父母の家庭で育ち、ミシェル夫人と結婚するまでオバマは黒人と生活したことがない。その上、ハワイは日系人が多数派のアジア系を筆頭に多人種が混ざり合う島だった。カリフォルニア進学で黒人の友達ができて徐々に黒人意識に目覚めるのだが、コアの仲間や恋人は白人や外国人だった。オバマが黒人性に覚醒したのはシカゴ黒人街での住民活動を通してで、厳密に言えばミシェル夫人との邂逅以降だ。シカゴの住民活動時代の上司や同僚も全員が白人だった。そのため、文学に没頭していた頃のオバマの話は、黒人政治家オバマの立志伝としてアピールしないどころか矛盾感も与え、政敵への攻撃材料になりがちだった。

オクシデンタルの学友らは「文学の聖地」ニューヨークを同時期に目指して、彼ら同士で下宿を共にしたり誰かの家に常に集まったりした。手塚治虫や藤子不二雄などの大漫画家を輩出した日本の「トキワ荘」のようなものをイメージしていただければよいだろうか。課題図書の批評会を兼ねた酒盛りも開かれた。オバマには創作のライバルがいた。同じアパートに住み、シカゴでオーガナイザーになった後も郵送で作品を交換して批評しあった仲間だ。オーガナイザー時代のある上司は、オバマがシカゴでの活動をモデルにした小説の執筆途中、生原稿を借りて読んだ。それがのちの『ドリームズ・フロム・マイ・ファザー』である。オーガナイザー経験ですら文学の素材だったとの見方もできる。作家オバマ青年の前半生は、私小説を書くためにあったのだ。

カリフォルニア時代、ニューヨーク時代、オーガナイザー時代を含む、ハーバード入学までの青年期の全時期を貫く交友関係が、オクシデンタルの文学仲間であり創作活動だった。しかし、彼らは皆、白人や留学生だった。アメリカ国内の黒人と無関係の交流歴は、コスモポリタン的な視野の広さを感じさせても、「アメリカ黒人」魂や愛国心の証明には逆行する。

「自伝」として一人歩きした文学作品

そして第3に、『ドリームズ・フロム・マイ・ファザー』という本の存在だった。政治家の「キャンペーン本」ではなく、作家オバマの作品だった。文学仲間は仲間の作家デビューを喜んだ。だが、政治家オバマの本としては不都

合な面もあった。オバマの著名化とともに「自伝」だと思われてしまったことだ。オバマの名誉のために言えば、彼はこれが自伝だと一度も言っていない。原書の副題にもそう書いていない。メディアや海外の翻訳版の版元が勝手に判断したことだ。

デイビッド・レムニックはこう書く。

「多くのジャーナリストは *Dreams from My Father* を読み、学術的もしくはジャーナリスティックな真実性の基準に則って本を書いていないことに失望した。実際、他の自伝作家と違い、オバマは読者に彼の本の柔軟な事実の扱いについて警告している。「作家に都合のいいように出来事に脚色する誘惑」と「都合よく記憶が欠落する」ことに自覚的であるとしている。純粋に事実を表現している振りはしておらず、フィクションのツールをいくつか適用している」

「登場人物は実際の人物の合成だ。（家族と著名人以外）名前は変更され、時系列も話の通りをよくするために変えたとオバマは認めている」[2]

回顧録『約束の地』でオバマは、『ドリームズ』刊行前までの前半生については最小限しか記載していない。これは回顧録前に別の自著がある他の元大統領達と同じ理由に見えて違う。彼の場合は前半生について述べる必要がなかったからではなく、へたに忠実な記載をすると小説仕立てだった『ドリームズ』との矛盾が生じて、世界的に混乱を招くからだ。オバマが本気で自分の前半生を正確な史実で振り返れば、それはそれで興味深い、ハワイ論、インドネシア論、コミュニティ・オーガナイザー論が期待できる。50 番目の州の離島出身大統領というだけで「亜流」なのにインドネシアからの「帰国子女」で、文学青年の青春を駆け抜け、住民運動で世界を変えることに早々に 2 年半で幻滅して弁護士資格の必要性に目覚める。

このオバマの一番面白い部分が回顧録ではこれ以上はない薄味の早回しで飛ばされている。親友や恩師の固有名詞は出てこない。『ドリームズ』はフィクション仕立てで架空の名前だったので、オバマに決定的な影響を与えた親友や恩師の実名が、結果としてオバマ自身の手による書物に記載されずに終

2. Remnick, David, *The Bridge: The Life and Rise of Barack Obama, Knopf,* 2010(石井栄司訳『懸け橋：オバマとブラック・ポリティクス』白水社、2014 年) 邦訳から。

わってしまった。それもこれも私小説『ドリームズ』が勝手に自伝として一人歩きしたことのブーメラン効果だ。

オバマは必ずしも筆が速くない。凝り症なのだ。完璧主義でもある。演説もそうだが、草稿を夜通しあれこれ納得するまでいじくる。『ドリームズ』の刊行が実現した頃、すでにオバマはハーバード大学ロースクールを卒業し、若き講師としてシカゴ大学で憲法論を講じていた。法律家の顔が社会的には主役だった上に、ミシェル夫人と出会っていた。自分のアイデンティティクライシスを解決するための精神治癒のような創作だった『ドリームズ』への黒人社会の好意的な反響で、オバマは「十分に黒人（ブラック・イナフ）」になれた手応えを感じ、政治家を志すようになる。この頃から文学仲間とも疎遠になっていく。

今回、回顧録の感想をオバマの旧友ら取材先に順に聞いて回ったが、案の定、最も評価が辛口だったのは文学仲間たちだった。オバマをプロとして見ているからでもあるし、彼ら自身の多くが作家やジャーナリストとして大成していることも関係しているが、それだけではない。オバマが文学や知に目覚めたあの時代、それを手助けした恩師や仲間がいたのだが、そのことを照れ隠しもあってか、『約束の地』では詳述せずに親交が深かった仲間たちをむしろからかうような描写をしたことに複雑な反応が入り混じった。

『ドリームズ』がなければ政治家オバマは生まれなかったが、前半生の史実を回顧録で深く書きこめない曖昧なままで終わる弊害を伴った。これは大統領史家やアメリカ政治研究者にとっても凄まじく大きい含意である。未来のオバマ時代の総括書にも影響を与える。オバマ評伝の著者として、筆者は回顧録での「答え合わせ」を心待ちにしていた。正面から自分史を語り直すことを期待していたからだ。ところがオバマは前半生を詳述しない手法を採った。それは、まだオバマには様々な「しがらみ」があることを示唆する。『ドリームズ』は嘘偽りない、オバマの黒人論であり人種物語だが、それが自伝ではないとすれば「黒人としての覚醒」は嘘だったのか？と悪ノリする政敵もいるからだ。『ドリームズ』は、政治的事情から今後もなんとなく自伝と勘違いされたまま回顧録と併せて読まれていくだろう。もちろん、オバマはまだ若い。回顧録とは別に彼の幼少期についての単著をいずれ記す可能性はある。いずれにせよ、世界のオバマ伝記作家の前半生部分の「答え合わせ」は、先延ばしになった。

さて、これで「前提」は整っただろう。オバマの演説が詩のような独特な流麗さとリズムを伴っていて、深遠な比喩に満ちた非凡なのもであったのも、今回の回顧録の不思議なトーンも、すべてオバマが作家であることに由来する。彼は回顧録でそれを発揮したいと待ち望んでいた。世界中の人に読んでもらえる大統領回顧録という「舞台」を用いて、心の中ではまだ作家でもある著者が、思う存分作品に凝りたいのは自明だ。オバマの欲求は流麗なレトリックや比喩を駆使した文学創作だ。オバマ回顧録でもそれを発揮したいと腕まくりして機会を待ち望んでいた。その意味で、他の大統領回顧録と並列することに適さない。

しかしながら、オバマの「文学性」は諸刃の剣にもなっている。本質を突いた観察眼を働かせた文章に表れるオバマの深い思索と俯瞰的目線は、政党や超大国の指導者としてはある種の弱さの表れでもあるのは事実だからだ。次回以降、内政と外交の記述を具体的に検討する中でそれを確認したい。

第 3 章

政治教育者としての「スピンドクター」

オバマ回顧録論の 3 回目は、「大統領オバマ」を製造し、政権の方向性にも多大な影響を与えたアメリカ政治特有のプレイヤーである選挙コンサルタント（メディア戦略専門家は spin doctor とも呼ばれる）について考察する。

「もう一つの目次」としての索引が示すもの

書籍の索引（index）は人物や事象の記載ページを辞書的にたどる上での手助けをしてくれるものだ。だが、意外な使い途もある。全体像の把握だ。索引欄には本文に登場したり引用される人物名、組織名、事実関係が網羅されている。索引を眺めるだけで、その本の輪郭が見えてくるし、事象のピックアップや呼称の仕方に著者の立場も滲む。「登場頻度」も一目瞭然だ。事項数が膨れ上がり、関連事項別に枝葉を分けた形で一段を占有する人物やキーワードもある。

筆者は「索引」は「第 2 の目次」だと考えている。目次と口絵写真と共に索引を眺めることも本文への想像力をかきたててくれる。アメリカの政治本の目次は、日本のビジネス書や新書のように小見出しまで詳細に盛り込まれないことも多い。章題だけでピンとこない場合は、索引が「第 1 の目次」の補完にもなる。

ただ、学術書ではない邦訳の翻訳では索引を省く慣習もある。ページ数で価格が決まる以上、読者に求めやすい価格に抑える版元の苦渋の決断で、致し方ない部分がある。今回の邦訳『約束の地』も索引が省かれている。

原書の索引を眺めて、目を引く 1 つがデイビッド・アクセルロッド（David Axelrod）という人物だ。索引によれば 73 箇所も登場する（複数ページにまたがる同一項目は 1 箇所でカウント）。索引ページの縦 2 段組の右段をほぼ占有し、次のページ左段にも 3 分の 1 ほど食い込んでいる分量だ。試しに他の人物を見てみると、ビル・クリントン（7 箇所）、ヒラリー・クリントン（68 箇所）、ジョージ・W・ブッシュと同政権（79 箇所）、ナンシー・ペローシ（19

箇所)、ドナルド・トランプ（3箇所)、ジョー・バイデン（43箇所)、ジョン・マケイン（42箇所)、ミシェル・オバマ（96箇所）といったところだ。副大統領や大統領の座を本選で競った相手よりも多く、政権の党の指導者や元閣僚とも肩を並べる。ブッシュ(子)への言及はブッシュ政権も含んでの数字だ。日本では一般的には知られていないような人物に73箇所もオバマが言及したのはなぜなのか。

彼こそが「大統領オバマ」の製造者だからだ。回顧録ではどのような指導を受けてきたか、大統領への個人指導としての「政治教室」の足跡を記している。政権でのアクセルロッドの役職は大統領上級顧問だった。だが、本業はテレビCMのプロデューサーにして選挙広報のコンサルタントである。アメリカ政治では彼と同じような選挙コンサルタントが政治家のプロデュースを行い、そのまま政権入りすることが少なくない。アメリカ特有の複数の事情が絡んでいるが、最も大きな理由は選挙である。

「政治家オバマ」の製造者：大統領顧問という名のコンサルタント

アメリカでは候補者単位で選挙陣営を構築して戦う必要がある。政党の公認候補を政党幹部ではなく、有権者が選挙で決めるので、予備選段階では政党は特定の候補に肩入れできない。民主党や共和党の全国委員会も予備選には介入しない。アメリカ特有の人種や宗教のセンシティブな要因が「地上戦」の重要性を高め、1960年代以降はテレビ広告など「空中戦」が拡大し、そして昨今ではオンラインの「サイバー戦」が欠かせない。候補者が個別に外部コンサルタントを雇用することで「選挙産業」が生まれた。

クリントンの元参謀のジェームズ・カービル、ポール・ベガラらは選挙戦略全般を専門とし、クリントンの顧問だったディック・モリスは世論調査専門家、ブッシュ（子）の元上級顧問のカール・ローヴはダイレクトメール業者、トランプの元首席戦略官のスティーブ・バノンは映画プロデューサーを経てネット・ニュース「ブライトバート」を拡大した。いずれもコミュニケーションやメディアが本業だ。学術的な広報の知見がある「専門家」というより、叩き上げの「業者」のイメージに近い。

共通しているのはコミュニケーションに関する実務経験からくる嗅覚だ。クライアントである政治家の世論対策や支持率に責任を持つ。日本では政治

家の側近である事務所の公設秘書出身の政務秘書官とは別に、官僚機構が官邸や大臣の広報機能を助けるが、終身雇用職の上級官僚機構が脆弱で選挙中心主義のアメリカでは、選挙戦を「一蓮托生」で請け負った人物の発言権がむしろ大きい。武力行使や紛争への介入から法案の妥協ラインにまで影響を与える。顧問は議会の承認が要らないが、大統領に雑談や耳打ちができる近さにいる。それだけの力を持つのに彼らは、外交や内政の政策のサブスタンスの専門家ですらない。彼らのコミュニケーション戦略上の判断が、政策専門家を押しのけて物事を決めることがある。

オバマ政権の「シカゴ・マフィア」

オバマ政権で一定以上の階職にいた補佐官がオフレコで語る共通の愚痴に、オバマのホワイトハウスでは大統領と夫人の側近を固める「シカゴ組」の権限が強く、その輪にアクセスできないと、政策的な影響を与えにくい構造があった。その中心にいたのがアクセルロッドだった。白人票を味方につけて黒人候補者を当選させることに長けていた人物だ。2008 年の大統領選挙でオバマのスローガンとして有名になった「Yes, We Can」は、アクセルロッドの発案だ。もともと 2004 年連邦上院選で使われたフレーズのリサイクルだった。「経済が問題なんだよ、おばかさん（It's the economy, stupid!)」という 1992 年のクリントンのスローガンを考えたのは前出のカービルだ。選挙で政策を売り込むロジックを彼らが主導し、政権誕生後も政策全般への影響力を専門外にもかかわらず維持する[1]。

オバマがアクセルロッドのことを「アックス」と苗字の方の略称で呼ぶのは、もう一人、「シカゴ・マフィア」の中にデイビッド・プラフという地上戦戦略に長けたコンサルタントがいたからだ(『約束の地』では 34 箇所登場)。同じ名前で紛らわしいのでオバマは彼らを苗字で呼んだ。他に政権初期の報道官からのちに米マクドナルド広報責任者に転じたロバート・ギブズ（46 箇所登場)、それに黒人女性のバレリー・ジャレットがインナーサークルだった（22 箇所登場)。政権で大きな力を一貫して持ったのは元大統領上級顧問のバレリー・ジャレットだった。「シカゴ・マフィア」で唯一、内部に 2 期 8 年残り続けたが、これは夫人の元上司という過去も関係している（ところで、ミシェルはクリントン政権前半のヒラリーの失敗に学び、政権の政策へ

1. カービルは政権の公職に就かずに、政権外から「パンディット」としスピン操作を担当した。

の関与を避けたが、政治外交情報はかなり共有されていた様子もある。例えば、オバマはビン・ラディン殺害という最高機密度の作戦を実行前に夫人には教えていたことを本書で明かしている)。

大統領顧問が「最強」なのは、口は自由に出せるのに責任を取るポストでないからだ。しかも、辞任した後も隠然とした影響を外から与える。トランプ政権の実力者だったジャレッド・クシュナーも上級顧問として自由さを確保した。首席補佐官は選挙での敗北や節目の危機の際に責任を負わされがちで短期で交代する。首を切りやすい特段親しくない人物を据えることもある。首席補佐官は党内や議会に精通した経験が必要なので「選挙屋」には務まらない。オバマは政権立ち上げ時には、政敵であるクリントン派のラーム・エマニュエル（60 箇所登場）を首席補佐官に迎えた。

オバマへの政治教育：選挙と演説

回顧録で彼らスピンドクターの「暗躍」や大統領への影響をどこまで赤裸々に書くかは大統領によりけりだ。クリントンは回顧録でディック・モリスが持ち込む世論調査で政策を決めていた過程をある程度まで開示しているが、部分的なものだ。オバマの『約束の地』には選挙を通してアクセルロッドらに政治家として育てられていく様子が克明に描かれている。上巻の前半の多くを占めるのは選挙、それも予備選だ。選挙活動で実に 87 日間を過ごしたアイオワ州への思い入れはとりわけ凄まじい。政治家一族でもなく、陣笠の１期目の新人上院議員が初戦のアイオワで民主党のエスタブリッシュメントだったヒラリー・クリントンを負かしたことは本当に事件だった。アックスがこう言った、アックスによれば、という類の表現が本書にこれでもかと頻出する。オバマは「特定領域の専門技能を発揮するために国民から雇われているわけではないのだ。世論を動かし、仕事を進めるためにうまく機能する連携を築く。それが大統領の仕事だ」（上巻 151 頁）と大統領を定義するが、これはアクセルロッドら選挙参謀に感化されてのことだ。

アクセルロッドらのコーチは「作家オバマ」のプライドの領域にも及んだ。演説である。オバマは名文家ではあっても政治演説は苦手だった。知識人的な冗長さが聴衆を退屈にさせ、主張が不明確だった。日本で有名なオバマの名調子は、アクセルロッドらによる矯正後の完成品である。

「どんなテーマであれ、私は無意識のうちにそれをいくつもの要素とさらにその下位の要素に分割していた。一つのテーマに二つの立場があるのだとすれば、たいてい私の頭には四つの立場がうかんだ。自分が話した内容に例外があるとすれば、それに言及するだけでは飽き足らず、さらにそこにも補足説明を加えようとした」（上巻 141 頁）

これではまるで講義である。案の定、アクセルロッドに根本から否定された。オバマが政治や選挙を心からは好きになれなかったのは、物事の単純化を迫られることが苦痛だったからかもしれない。

「『論点が何かわからなくなっている！』。私が延々と話しつづけたあと、アックスなどは文字どおり吠えていた。その後、1 日か 2 日は私も素直に従って簡潔さに意識を集中させるのだが、どうしても自分の主張の細かなニュアンスを伝えたいという気持ちが抑えられなくなり、貿易政策や北極圏の海面上昇問題について、10 分間にわたる解説を始めてしまうのだ。『どうだった？』。ステージを降りながら私は聞いた。説明の丁寧さについては満足のいく出来だった。『小テストの解答としては満点です』とアックスが答えた。『ただし、票にはつながりません』」（上巻 141 頁）

「脱人種」路線とスピンドクターたち

たいていのことはアクセルロッドらの「指導」に従ったものの、オバマが参謀らの方針にわだかまりを感じていたことが一つあった。「人種ニュートラル戦略」である。アメリカの人種問題は少しも解決していない。そもそもオバマは人種問題を避けてきた。オバマが目指した人種問題の解決の仕方は「人種を論じない」アプローチだったからだ。それは彼の独特の生い立ちがそうさせた部分と、政治戦術的に周囲がそう強いた面と、二つの要因がある。

選挙参謀たちはオバマに人種を語らないように指導した。オバマは回顧録で以下のように述べている。

「プラフもアックス（アクセルロッド）もギブズも、人種についての不満表明であるとみなされそうな問題、有権者どうしを人種で線引きしかねない問題、私を〝黒人候補者〟という枠に押し込めてしまいそうな問題についてはことさらに取り上げる必要はなしとして譲らなかった」（上巻 193 頁）

「公民権や警官の職権濫用、その他黒人に特有の問題ばかりに焦点を当てすぎると、より幅広い有権者層から、反感とまではいかずとも不信感を持たれてしまうと懸念していたのだ」（上巻 197 頁）

白人の支持を得ることが黒人候補として勝利の要だった選挙だったからだが、オバマ政権の問題は政権発足後もこの人種ニュートラル戦略を貫いたことだった。

「アクセルロッドに示された大量のデータによれば、私の支持層も含めた白人の有権者は、人種に関する長々とした説教にはあまりよい反応を示さない」（下巻 115 頁）

こうした人種風土に風穴を開けることを放棄し、波風を立てずに他の政策に集中したのだ。

オバマはスピンドクターのおかげで大統領になれたことを素直に認めながらも、彼らに従いすぎたことに起因する問題も示唆している。それでもオバマがコンサルタントとしてアクセルロッドを信頼したのは、彼がイエスマンではなかったからだ。アクセルロッドはあり得る最悪のシナリオを提示して、オバマに選択させた。オバマを褒めそやさず、弱点もずけずけ指摘する。実利的なオバマはへつらいに価値を見出さず、耳に痛いことを指摘し、リスクを教えてくれる冷徹な参謀を好んだ。大規模な医療保険改革を目指すオバマに対して、アクセルロッドがエマニュエルと二人で冷水を浴びせるシーンが出てくる。アクセルロッドは「もし失敗すれば、あなたの大統領としての地位が大きく損なわれることはご承知おきください」（下巻 72 頁）とまで脅かした上で、大統領に最後の決断をさせている。

慎重な「回顧録」戦略：終わりなき「キャンペーン」として

広報のプロに育てられて大統領への切符を手にできたオバマからは、退任後もまだ選挙戦を続けているかのような慎重さが抜けない。終わりなき「キャンペーン」の継続の証が、今回のオバマ回顧録の企画・販売における戦略性だ。まず異例の刊行の遅さと分冊方式だ。本シリーズ 1 回目で述べたように、大統領回顧録は基本的に次の政権中に出る。出版が遅かったクリントン回顧録ですら 2004 年 6 月に刊行されている。オバマの回顧録は 2020 年 11 月。後

任の再選を決める大統領選挙後まで刊行されず、蓋を開ければ「前編」だけ。「後編」はまだ先だ。

オバマは回顧録執筆の過程で膨大な量の初稿の削除編集に凝ったとされているが、トランプ政権誕生は無関係ではないだろう。ヒラリー政権であれば書き方が変わった。回顧録は時間が経過するほど、純粋な政権記録から逸脱し、後任時代との比較による自分の政権成果のアピールになってしまう。トランプ再選が確実な場合、バイデンやトランプについての記述に一定の差し替えも要しただろう。公刊ゴーサインや延期カードの検討に（発動せずにすんだ）、世論調査やコロナ禍も間接的に影響を与えたはずだ。オバマにとって回顧録出版は「本」であると同時に、まだ「政治」なのだ。

つまり、トランプがどこまでオバマのレガシーを転覆させるか、また中国や中東の世界情勢がどうなるかを見極めてから、自分の政権の政策に対する「説明」を確定させたい希望が透けている。後続政権への世間の反響を見ながら、「後編」の筆致の調整もできる。凄まじい慎重さだが、賞味期限の長い本を目指す上では納得できる。後続の政権の動きや世間の評価を見届けないままで仕上げる通常の回顧録は、政権記録としては価値があるが、それゆえに「読みの甘さ」を露呈するリスクと隣り合わせだからだ。成果だと自画自賛した法案がすぐひっくり返されれば目も当てられない。オバマは過剰な自画自賛や断定的な分析を巧妙に避けている。これは回顧録に深みと安定性を与えたいと欲張るがゆえの慎重さだ。

フランス語翻訳版の表紙※

※ Photo by ©Alexis Sciard/IP3 via ZUMA Press ／共同通信イメージズ

また、各言語の翻訳版に対する「縛り」も徹底している。オバマには1冊目の著書が「自伝」として世界で一人歩きした苦い経験がある。今回の回顧録は表紙・口絵写真の統一やタイトル訳まで管理されており、日本の翻訳書の慣習である「訳者あとがき」も許されていない。

日本ではアメリカ大統領回顧録は新聞社や新聞社系列の出版社など報道機関が翻訳権を獲得することが多かった。過去例を見ても、フォード（サンケイ出版）、カーター（日本放送出版協会）、レーガン（読売新聞社）、クリントン（朝日新聞社）、ブッシュ（子）（日本経済新聞出版）と持ち回りのような顔ぶれだった（「本論考の第1章」で触れたように（父）ブッシュには厳密な意味での大統領回顧録がない）。この連鎖がオバマで断ち切られた。集英社はコンドリーザ・ライス回顧録で実績があり、ミシェル夫人の回顧録でも成功を収めているが、報道機関ではない版元から出るのは珍しい。

版元が報道機関でも、訳出が元ワシントン特派員らで行われる場合と、プロの翻訳家に依頼される場合とがあり、前者型では当該大統領を解説する別の種類の本になるケースもある。カーター回顧録が典型で、監修のNHKのベテラン記者の冒頭企画が盛り込まれていて、NHKの番組を本にしたようなテイストが漂う。解説は「異文化の橋渡し」としては日本の翻訳書文化の意義ある慣習なのだが、それを誰がどういう形で担当するかには解答はない。しかし、それだけにオバマのように原著者がナーバスになるのも理解はできる。また、各言語の言語事情から、翻訳は一元的な管理に本来は向かない問題もある。たまたま*A Promised Land*は『約束の地』という日本語でもシャープ感のあるタイトルでハマったが、ミシェル夫人の回顧録のように日本語に直訳しにくいタイトルだった場合は苦しい（夫人回顧録の原題は*Becoming*で直訳しても意味が伝わりにくいため、邦題は独自タイトルの『マイ・ストーリー』になっている）。

複数での翻訳は下訳のスピードは圧倒的だが、訳語の統一や文体の調整に手間がかかるので詰めの段階で時間がかかる問題もある。しかし、『約束の地』はこれが10人で訳されたことを感じさせない仕上がりになっている。口絵キャプションまで原書の再現を徹底しているが、要所、要所で日本の読者に

2. 近隣の面前で自らが差別主義者ではないことを誇示するために、白人の左派は人種マイノリティ候補者を支持する行為に及ぶ傾向があるため、民主党の党員集会方式では人種マイノリティの候補が有利になる。デラウェア大学教授でアイオワ州党員集会研究の第一人者の政治学者、デイビッド・レドロスクも民主党側の党員集会での人種をめぐるダイナミズムを以前から指摘してきたが、この恩恵を特に受けたのがオバマだった。

伝わる工夫も施されている。

舌を巻いたのは、カバー袖の要旨欄で「アイオワ州予備選」と書いてあることだ。原書では iowa caucus で直訳すればアイオワ州党員集会である。オバマ勝利は「党員集会」であることにミソがあったので本文でも要旨でもアイオワが強調されている。初戦が秘密投票ならオバマは不利だった[2]。専門的には党員集会のままで訳したいところなのだが、カバー袖は店頭で手にとって眺める場所だ。徹底した「わかりやすさ」が優先する。選挙の形態の一つであるとは分かりにくい「党員集会」を避けて「アイオワ州予備選」としておくのは一理ある。日本向け書籍の判断としては実は秀逸な機転訳だ。だが、鳩山元総理への言及部分の翻訳は、日本版にとって思いがけない難所となった。

第 4 章

政権の「公式写真集」として

オバマ回顧録論の 4 回目は、「政権公式写真集」でもある回顧録における写真の含意、そして翻訳をめぐる問題について考察する。

ホワイトハウス公式写真家と「写真」によるレガシー演出

81 枚――。オバマ回顧録の第一段である『約束の地』に掲載された写真の枚数だ。邦訳は全ての写真を 1 枚も変えずに、原書と同じカラー写真のまま良質の紙を用いて口絵としてしっかり盛り込んだ。これだけで凄まじいコストがかかっていることは容易に想像できる。

現代の大統領回顧録は、多数の口絵写真を含む「政権の公式写真集」の色彩も持つ。その縁の下の力持ちがホワイトハウス専属写真家だ。日本の官邸の公式カメラマン（公カメ）との相違点は、表敬や視察などの場面における広報用の公式カメラ的な役割を超えて、大統領の日常やスタッフとの会議の場に、（政権で温度差はあるのだが）入り込むことを許されている点である。専属料理人らと同様、ホワイトハウスで大統領に極めて近い場にいる特別な職だ。そこには写真の記録価値をめぐる冷徹な広報戦略の意図が透ける。

大統領専属写真家は個人としても著名になる。代表例にクリントン政権 2 期の首席ホワイトハウス公式写真家だったロバート・マクニーリーがいる。ウィキペディアの人物項目が立っているほどで、大統領側近の上級補佐官やスピーチライターでも誰もが項目が立つわけではないことを考えれば、特殊な地位を想像していただけるだろう。全篇が白黒写真で貫かれた彼の写真集 *The Clinton Years* (Callaway, 2000) は名作と言われる。内部の迫力と臨場感では他のホワイトハウス写真集を寄せ付けないものがある。

大統領は公式写真家と家族ぐるみの信頼関係を築き、できれば秘密も握り合い、ホワイトハウスに 4 年、8 年、出入りしてもらう。信頼関係が築けなければ、スキャンダル紙に情報を流されかねないし、国家安全保障に関する重要な立ち話もある部屋の雑談シーンを撮影させるわけにはいかない。本当

に臨場感のある写真は演出では難しい。凄まじい枚数を撮ったうちの「渾身の一枚」が世に出る。1枚の背後には100枚がある。大統領夫妻がOKを出せる写真に到達するには、普段から信頼できるカメラマンを様々な内輪の場に入れる必要がある。

ホワイトハウスのスタッフもカメラマンを空気のように扱うことに慣れると、よい写真が撮れるようになる。テレビに密着されるときにカメラを一切意識しないフリができる能力に似ている。一人でもカメラを意識して睨み付けているスタッフがいると、写真を鑑賞する者が「神の目線」で現場をこっそり覗き込んでいる「歴史探訪感」が出せない。クリントンの前掲写真集は、アメリカの政治内幕ものに必須の、スタッフと政治家の打ち合わせシーンの写真がふんだんに盛り込まれていて、紛糾、疲弊、混乱の様子など、怒号や興奮が伝わる。カメラマンが見事に姿を消している。

スチール写真は、動画やSNS時代の今でも、大統領や政権の「レガシー戦略」の中核を担う要素である。会見や演説のステージに出る前の舞台袖の後ろ姿、祈りを捧げる横顔、大統領のこうしたカメラ目線ではない、人間臭い1枚の白黒写真は「レガシー感」を喚起させる、映像とは別の不思議な力がある。だから大統領は公式カメラマンにできるだけ舞台裏を撮らせる。彼らは聞いてはいけないこと、見てはいけないものなど、墓場まで抱える厄介な人生を生きる。

大統領回顧録にも写真が盛り込まれる。大統領写真集は写真家の編集による作品が多いが、大統領回顧録内の口絵写真は元大統領自身が編者だ。回顧録の写真には、文章以上に元大統領の心象が浮き彫りになる面すらある。スペースと数に限りがあるからだ。平等に同サイズを羅列するわけではない。どの写真を選んだのか、どの順番で、どの大きさで載せたのか、そして何を載せなかったのかに、元大統領の政治観、外交観、政権ブランディングの意図が如実に滲む（オバマ回顧録が各言語版に編集権を一切与えないのも理屈上は正しい。管理中毒と囁かれる悪評リスクと天秤にかけてでも、レイアウト変更や写真の取捨選択の禁止を優先した）。

オバマのホワイトハウスを8年担当した首席公式写真家はピート・ソウザという人物で、彼もウィキペディアの項目が存在するほど著名なカメラマンだ。ソウザが興味深いのは超党派性で、レーガン大統領2期目の公式写真家

も務めた。

彼らがどれだけ内部で撮影しているのかという例でおそらく分かりやすいのは、我々が覚えているビン・ラディン殺害時の写真だ。オバマ大統領、バイデン副大統領、クリントン国務長官らが、現地部隊の作戦の様子を食い入るように見ているこの有名な写真もソウザの撮影である[1]。無論、これも政権の広報戦略の一環であり、ソウザは「役目」をしっかり果たしている。ホワイトハウス内部の写真は、ほとんどソウザの撮影である。彼無くしてオバマ回顧録は成立し得なかった。

ビン・ラディン殺害作戦時のホワイトハウス内部の写真

青少年期写真の欠損：「個人史」ではなく「公式の大統領像」の政治的再定義としての回顧録

元大統領の心理として、限られたスペースに所狭しと、1枚でも多くの写真を入れようとするタイプもいれば、「集中と選択」のタイプもいる。会った首脳、訪れた場所は全員入れたいという、記録性を重視するのが前者だ。後者は、そうではない。切り捨てるところに「意味」を持たせる。どうせすべての出来事、訪問地、議員、上級スタッフは入れられない。羅列的な写真の数々か、何かを物語る写真の数々か、後者のオバマの写真の選び方には、独特の芸術的なセンスすら光る。良い意味での「無駄」が多いのだ。

そのため、より挿絵的、象徴的な写真が多い。2008年11月の大統領選挙

1. ホワイトハウスがフリッカーに公開している写真
<https://www.flickr.com/photos/obamawhitehouse/5680724572/>（2021年5月25日参照）。

勝利当日、ワシントンのリンカン記念堂の石段に座り込んでラジオで勝利演説を聴く人々のモノクロ写真には１ページを割く。前者的発想なら４～５枚の写真を入れられるのにもったいないと思うが、オバマは美しい写真に何かを語らせる。「本論考の第２章」で紹介したように、2011 年のリオデジャネイロ訪問に関して、本文では、興味のなさそうな夫人や娘の雰囲気を赤裸々に描いていた。だが、写真はキリスト像を家族４人で眺める後ろ姿を選定し、さりげなくブラジルへの敬意にバランス感覚を発揮している。霧がかかったリオデジャネイロの幻想的写真は『約束の地』の口絵写真のエンディングにふさわしい味わいを醸し出す。

さて、その「集中と選択」のオバマ回顧録の口絵写真には、以下３つの特徴がある。

第一に、青少年期の欠落である。オバマは「初の黒人大統領」としてアメリカ史での役割を背負わされた。個人史としてはハワイ生まれインドネシア育ちで多文化的で、白人や外国人留学生との交流が深い文学青年だったが、それらを盛り込むとオバマの公式のイメージは複雑になりすぎる。黒人有権者を混乱させることにもなる。写真のイメージ力は凄まじく、文章で書く以上にある人物の生い立ちの印象を定義する。そこでオバマは、回顧録に青少年期の写真を１枚も載せないという荒技にでた。

これには筆者も驚いた。ビル・クリントンの回顧録には高校時代のサックス演奏の様子、ケネディ大統領との面会、大学卒業式、イギリス留学時代、イェール大学ロースクールのクライメイトとのスナップまで、若き頃の写真が掲載されている。これまでの著作でもオバマは学生時代の写真を掲載していたわけではない。それだけにクリントンほどでなくても、多少は写真を掲載するのではないかと予想していたが、祖父母と母親、ケニア人の父親のほか、大人になる以前の本人写真は赤ん坊時代だけだ。

同じく複雑な家庭環境だったクリントンが継父の写真をしっかり載せているのに対して、オバマはインドネシア人の継父を掲載していない。私生活では実は一番絆が深い親族である妹マヤ（母アンとインドネシア人の継父との間の娘）は１枚だけだ。しかもその１枚も、母親のアンとケニア側の姉であるオウマとマヤの３ショットで、「アフリカ」と「インドネシア」のバランスをとった。しかもサイズも顔が判別つかないほど米粒のように小さな写真

だ。まさに「インドネシア抑制」が徹底している。

学生時代、コミュニティ・オーガナイザー時代、ロースクール時代の写真も１枚もない。口絵の２ページ分にまたがる家族写真の後、口絵３ページ目は冒頭から突然ミシェルとの結婚式に飛ぶ。「公式写真集」でこれまで通り黒人性を強調する上では、ケニアの父の紹介の後はミシェルに「ワープ」せざるをえなかったのも納得はできる。だが、これは「黒人大統領」としては正解でも、オバマ個人の歴史としてはあまりに部分的な写真選択だ。大統領回顧録が、大統領だった人物の「個人史」ではなく、「公式の大統領像」を自ら政治的に再定義する書であることは、このことからも理解できる。

第二の特徴は、選挙と就任式の写真の多さだ。上院議員時代を含めると選挙関連だけで 17 枚前後、就任式当日だけで４ページものスペースを割いている。つまり、黒人として初めて民主党の予備選を勝ち抜いて指名を獲得し、本選挙で勝利し、非白人として初のアメリカ大統領になったことをオバマは「最大の成果」と位置付けていることがわかる。同じく民主党で世代交代を果たしたクリントンは、回顧録に載せた就任式の写真は２枚だけだった。

微妙な日本の存在感と「時間差分冊」刊行の弊害

そして第三の特徴は、日本の写真がないことだ。これまでの大統領回顧録には何らかの形で「日本」が盛り込まれることが多かった。ビル・クリントン回顧録は小渕総理とのツーショットを掲載している（来日時に沿道で星条旗と日の丸を振って歓迎する日本の子どもたち込み）。中国の江沢民国家主席とのツーショット掲載とのバランスをとった。ブッシュ（子）は小泉総理との写真、大統領回顧録ではないがヒラリー・クリントンは国務長官回顧録（*Hard Choices*：邦題『困難な選択』）に、美智子皇后陛下（当時）との写真を載せている。2009 年の国務長官就任後の初外遊での来日時のものだ。

オバマ回顧録にも厳密には日本の写真が１枚もないわけではない。2009 年Ｇ８サミットの集合写真で麻生総理が端に小さく写り込んでいる。しかし、同写真のキャプションにはサルコジ大統領、メルケル首相という仏独首脳への言及しかない。人物は写っているがキャプション上、Japan が出てくる写真は１枚もない。

写真は掲載の構図や大きさも意味を持つ。あるページには、上段に英国女王エリザベス２世、下段に中国の胡錦濤主席との写真をそれぞれ半ページの特大サイズで掲載している。外国指導者としては、インドのシン首相、イスラエルのネタニヤフ首相、エジプトのムバラク大統領らとの写真も掲載された。それ以外は、負傷兵見舞い、アフガニスタン慰問など軍関係者の写真が多いのが目立ち、ビン・ラディン殺害を見守るシーン、ノーベル平和賞受賞式などが並ぶ。

写真の選択はオバマの独断で決めているわけではない。様々な関係者に相談してのことだし、あからさまな重視、軽視はアメリカの内政、外交に誤ったメッセージを送る形で影響も与えてしまう。大国外交の観点で中国の国家主席との写真を入れる選択も常道だ。他方で、上述のブッシュ（子）はダライ・ラマ 14 世との写真、ヒラリーは国務長官時代に中国からアメリカに亡命させた盲目の人権活動家の陳光誠氏も載せている。陳光誠氏は 2017 年の初来日で、北海道大学大学院のメディア・コミュニケーション研究院が主催したシンポジウムに参加したが、トーク終了後の楽屋の雑談で「今でもクリントン元国務長官には心から感謝している」と筆者に吐露していた（他方、2020 年大統領選挙では対中政策からトランプ大統領を支持）。

オバマの『約束の地』の写真選定において、「胡錦濤主席との北京でのツーショットを大判で入れるのであれば、日本の総理の写真も入れましょう」との助言が周囲になかったことを窺わせるが、続編を見ずに結論を急ぐのはフェアではないだろう。日本は後編に沢山入れようという判断もあり得る。２期目についてはおそらく広島訪問の写真が掲載される可能性は大いにある。また、日本以外に関する「バランス」でも、オバマの場合、例えばダライ・ラマ 14 世とも 2 期目の 2015 年まで公式の場では顔を合わせていないので、１期目途中までの『約束の地』には入りようがない。

逆に言えば、これはオバマ独自の大統領回顧録「時間差の分冊」の弊害だ。分冊は均等には扱われない。どうしても１冊目に強い注目が集まる。すると１冊目の写真だけで元大統領の関心の軽重を判断されることを完全に避けることはできない。時系列上は２期目の話題でも、誤解を避けて「重視」をアピールしたいなら、理由を適当に作って「前出し」でも扱える。回顧録をどう捉えるか、ここは元大統領次第だ。同時代の現在進行形のアメリカ外交に責任を持つ書だと思うならば、「同盟」をある程度は写真に強く反映させる

考えもあろう。

しかし、オバマは大統領回顧録の写真は個人の関心を恣意的に反映させる場だと考えていることがわかる。当時の関心や政権の現実に極めて忠実だ。オバマ政権１期目、外交は国務長官に丸投げで自動操縦できる態勢を築き、医療保険制度改革や内政に注力した。あからさまな取捨選択だが、『約束の地』で扱われている時期に限定すれば、オバマの頭の中心に「首脳外交」がなかったことは事実である。そうしたことが写真のラインアップにも浮き彫りになる。回顧録は筆頭編者を元大統領に抱えた贅沢な「政権写真集」でもあり、元大統領の脳内に繋がるもう１つの回路でもある。

第５章

諸外国と「文化」言及のジレンマ

オバマ回顧録論の５回目は、外国について回顧録が言及する含意について、日本を事例に振り返りながら、大統領一家の外国語学習論にも視点を広げて考察する。

閣僚回顧録との相互牽制

上司の大統領が回顧録を出すまで、閣僚や補佐官が政権回顧録を出してはいけないというルールは厳密にはない。元部下は次々と本を出す。「裏切りの書」も大統領在職中に出る。大統領が、威厳を維持した堂々とした回顧録の出版を無事に成功させるには、元部下の誰がどの時期にどのようなスケジュールで回顧録を出そうと画策しているか、把握し尽くさなくてはならない。

また、上司の大統領とライバル関係にあった元閣僚にとって、大統領回顧録よりも先に回顧録を出して、事実描写を誘導したり、記述の方向性を牽制したりするのは、最後のささやかな「争い」だ。

そこで付随的に浮上するのは、ある政権の内政・外交の足跡を理解するときに、大統領回顧録に単体でどのような意味があるのかという問題だ。例えば、政権の外交を多面的に理解したいのであれば、実際には国務長官や国防長官の回顧録と併読しないと、政権の全体像は浮かび上がりにくい。無論、大統領回顧録には「元大統領がどう考えていたのか」を知れることに価値がある。要は、目的をはき違えなければよいだけだ。大統領回顧録１冊に依存して、ある政権を描き出すことに意味がないだけである。

元大統領と元閣僚は、それぞれの回顧録を書く上で、明確な役割分担や編集の打ち合わせをするわけではない。先に出した方が影響を与え、「引き算」の発想を後続の著者に生じさせる。特にオバマ政権１期目の外交のディテールは、前回紹介したヒラリー回顧録でそれなりに語り尽くされているところがある。オバマが『約束の地』で外交に過度に頁を割いていない間接的な理

由は、国務長官の方が最前線の外交に詳しい記録を先に残してしまったことも関係する。ヒラリー本の内容を個別に否定すれば政権を掌握していたはずの指導力に傷がつくし、全てを肯定しても二番煎じになる。

これでもかと、凄まじい数の訪問国、世界の要人との出来事を羅列的に書き込んだヒラリーの回顧録との「張り合い」を避け、オバマはあえて文学的描写と達観的な政治観の提示で独自性に走った。その意味で、オバマ回顧録にオバマ政権の外交記録を求めるのは正しい読み方ではなく、国務長官回顧録を併読されることを前提とした開き直りが滲む。すべての国や首脳に平等に文字数を割くことに過度な期待はできない。しかし、羅列的ではない限定記述であるがゆえに、なおさら元大統領の記述対象国とそのトーンに深い意味が伴うとも言える。

「ニュース化」と「翻訳」の狭間：日本の事例から

大統領回顧録が刊行され、各国のプレスが最初に行うのは自国がどう言及されているかを記事にすることだ。就任演説、一般教書演説、党の綱領などの文書と同じだ。日本の報道関係者も「Japan」という文字を探す。今回の回顧録では鳩山由紀夫総理（当時）についての言及が波紋を呼んだ。

ただ、各国プレスが自国に紹介する場合の目的は一義的には「翻訳」ではなく「報道」である。すなわち何か「ニュース」を探して、「見出し」を立てる必要性から逃れられない。自国や自国の指導者が言及されている個所を見つけて「ニュース化」する際、それがポジティブかネガティブかの価値解釈に引きずられるのはそのためだ。しかしそれだけに、一部分を抜き出して国内に紹介する上で、ミスリードへの緊張と責任も背負う。Kindle もネットもなかった 1980 年代までならば、報道機関がそう書いてしまえばそのまま受け入れられることがほとんどだったが、裾野の英語力も増し、SNS で疑問が広がる現代では異論が噴出することもある。

オバマ回顧録は、2020 年 11 月の原書発売を受け、日本の報道各社も内容を紹介した。以下の原書 477 頁（邦訳版の下巻 218 頁）にある日本に関する記述は、2009 年の 7 日間のアジア歴訪の最初の訪問地として「外遊録」的に登場しており、日本単体を深掘りして論じたものではない。

A pleasant if awkward fellow, Hatoyama was Japan's fourth prime minister in less than three years and the second since I'd taken office - a symptom of the sclerotic, aimless politics that had plagued Japan for much of the decade. He'd be gone seven months later.

この箇所を紹介する報道が話題となった理由は、A pleasant if awkward fellow をどう訳すかという問題と、鳩山総理を「迷走した日本政治の象徴」とまで言い切れるかどうかの問題だった。すでに各方面で論じ尽くされているので、重要な指摘を紹介する形で問題を整理しておきたい。

まず、前者に関して翻訳家の鴻巣友季子氏の指摘は説得力があり実に的を射ている[1]。A if B と書かれている場合、if 以下の B の部分が付属的な言及で、B という点はあるのだが、それでも A だと理解するのが自然だからだ。鴻巣氏がいみじくも指摘しているように、この「順番」が決定的に重要だ。『約束の地』集英社訳では、「話し上手ではないが感じのいい」と訳している。この訳を土台に A と B の順番を試しに入れ替えると、「感じはいいが話し上手ではない」となる。こうなると俄然、ニュアンスがネガティブになる。

英日翻訳に 20 年近く細々と関与してきた筆者にも他人事ではなく、さらなる良訳への向上心を込めてなのだが、単語の訳出そのものには多様な表現があり得るもので、これは訳の個性の範囲である。日本語の豊かな表現の範囲内で、pleasant は「感じが良い」のような「あたりの良さ」を表すポジティブな含意の様々な訳が想定でき、awkward は「やりにくい」「話しにくい」などネガティブな含意の様々な訳があり得る。日本語論としてどのような訳語が著者の意図に近いかの議論も可能だが、それ以前の前提として、どちらに著者の比重があるかの A と B の順番は読み違えてはいけないとの指摘は妥当だろう。

他方、鳩山総理を日本政治の迷走の「象徴」とまで言い切れるかの問題であるが、これは多様な視点が存在するようだ。symptom は「症状の 1 つ」で「全体を象徴」しているとまでは言えないという見方ももちろんできる。しかし、「顕在化」「反映」であることも事実なので、静的に翻訳に徹するならば踏み込むべきではないかもしれないが、「ニュース」にするならば、「回顧録でオ

1. 鴻巣友季子「日本メディアの『オバマ回顧録』の翻訳、その訳文がはらむ『危険性』を考える」『現代ビジネス』2020 年 11 月 29 日 <https://gendai.ismedia.jp/articles/-/77813?page=2>（2021 年 5 月 25 日参照）。

バマ前大統領が日本政治についての否定的な認識を盛り込んだ」と原稿化する意図は理解できる。ただ、揶揄の対象が鳩山総理個人に限定されていない点は注意が必要だ。

集英社訳は「話し上手ではないが感じのいい鳩山は、日本ではここ3年足らずのあいだで4人目の首相であり、私が就任してからは2人目だった。これは、過去10年に渡って硬直し、迷走していた日本の政治を象徴していた」となっており、「象徴」と訳して踏み込んだ解釈をしている。しかし、「これは」として、象徴の対象として揶揄しているのは、鳩山氏個人ではなく、総理が次々と変わる日本の政治との理解だ。比較的バランスの良い訳だろう。「過去10年にわたる硬直」には政権交代前の自民党も含まれるからだ。

いずれにせよ言えることは、オバマの「日本政治」への記述は決して肯定的ではないことだ。鳩山総理への個人攻撃ではないのだが、安定しない日本政治への不満の事例にされてしまったのは事実だ。オバマが鳩山氏を、政治を変革する「チェンジ仲間」と認識したならば、日本政治では例外的な存在として積極的に評価する書き方をしたはずだからだ。これもオバマ特有の間接的な文章表現の特徴で、現象と個人のどちらへの批評なのか分かりにくい手の込んだ言い方をあえて好む。日本政治への不満が主題でも、それを鳩山氏との邂逅に混ぜてくるのは、失望や期待外れを人物にも絡めて示すオバマ流のポライトな皮肉表現だ。

とりわけ鳩山氏は政権交代直後の総理だった。オバマがそのことに一切触れていないのはやや気になる点だ。日本の当時の政権交代そのものを無価値と理解していたのか、外交安保における日米関係の安定性の方が重要だと考えていたのか。例えば、同じ民主党大統領だったビル・クリントンは細川護熙総理（当時）を以下のように回顧録で記述している。

「日本の新しい指導者、細川護熙首相とは充実した時間を過ごせた。自由民主党の政権独占を崩し、経済的には従来どおり開かれた日本を推進していく改革派だ」（邦訳版『マイ・ライフ：クリントンの回想』下巻149頁）

2. 冷泉彰彦「【オバマ回顧録】鳩山元首相への手厳しい批判と、天皇皇后両陛下への『お辞儀』の真実」『ニューズウィーク日本版』2020年11月19日 <https://www.newsweekjapan.jp/reizei/2020/11/post-1201.php>（2021年5月25日参照）。

オバマと同じく「チェンジ」を 1992 年大統領選のスローガンにして勝利したクリントンが、日本の総理を政権交代に絡めて紹介した回顧録のこのくだりを覚えている人には、時代背景が違うとはいえ、対照的に感じられたはずだ。その意味で、冷泉彰彦氏の論考[2]にあるように、オバマ回顧録の記述が「手厳しい批判」だったことは大筋では間違いはなく、特に同氏も指摘するように普天間基地移転問題が絡んでいたことは否定できないだろう。オバマはあえてこの箇所の直前で、鳩山総理との会談内容として「沖縄の海兵隊基地の移転案」と明示している。一般のアメリカ人は理解できないだろうが、当時の混乱を覚えている日本人や日米外交筋にはピンとくる、分かる人には分かる書き方だ。作家オバマのやんわり匂わせつつ刺激的な毒をさりげなく混ぜる文章は、ストレートにネガティブな評価が伝わらない筆致なのだ（本論考の第 7 章で紹介する中国論でも同じ手法を用いている）。

「文化」言及をめぐるオバマ流の抑制

ただ、その後段の当時の天皇皇后両陛下への親愛の情は、素直なものと読める。型通りの敬意ではなく、両陛下の心を察した独自の言い回しに踏み込んでいるからだ。その関連で「お辞儀事件」に自ら触れているのも興味深い（陛下の前で直角に近い角度でお辞儀したことが米メディアで批判された一件）。

ハワイで生まれ育ったオバマは明治元年以降に移民してきた日系移民の恩師や親友に囲まれて育ち、天皇陛下の存在について耳学問ではあるが一般のアメリカ人とは異なる敬意を抱いて育った。日本人の作法としてお辞儀は深いほど謙遜を示すという断片知識が少し歪んだ形で肥大化していただけで、不器用だが精一杯の特別な敬意の示し方だったと言える。「自分は日本文化にも近い位置で育った『アジア太平洋人』である」という、アメリカ国内派への差異化の自負心が咄嗟に頭をもたげたのかもしれない。

オバマの青少年期の関係者に話を聞けば聞くほど、背後に上記のような複雑な心理も部分的には介在した可能性を感じさせる一方、オバマ自身は回顧録で、「お辞儀批判」は純粋に保守派からの言われのない攻撃だとして、分極化の下での政争による中傷として片付けた（邦訳版下巻 219 頁）。

アメリカ国内にアジア文化論を説明しても理解されないことをオバマは知っている。文化的にアメリカの理解の範囲に収まらないことは、概ね保守

とリベラルの分極化のせいにして共和党を叩けば、民主党読者はそれで納得してくれる。アメリカの国内政治の二項対立を内側(民主党内)に向けて演じ、自らの多文化性の表現の抑制に努めるのは、オバマ流のアメリカ政治の遊泳術である。

たしかに文化ネタは、外交上も余計なシグナルの原因となりかねない。文化を外交に持ち込むことはハイリスクである。何がその国や地域の固有の文化かへのコンセンサスの境界が微妙なことがあるからだ。特にアメリカ人は、他の人種エスニシティへの尊重が転じて、自分が属さないグループについては政治現場でも「アジア系」「中華系」と輪切りにして片付けがちだ。

イラク戦争で急落したアメリカの尊敬回復の任を担ったオバマ政権は、政権発足直後、「異文化に寛容なアメリカ」への息吹を感じさせられるネタを貪欲に用いた時期がある。アジア言語を娘が学んでいることは格好の素材だった。ホワイトハウスは、オバマの下の娘のサーシャが中国語を勉強していることを公にして、2011 年の胡錦濤訪米時にサーシャが中国語で挨拶をしたことを「文化交流」ネタにもしていた。だが、時系列上はビンラディン殺害前で記述範囲のはずのこの一件は『約束の地』には出てこない。

2008 年の大統領選挙戦の遊説で、「アメリカ人も何か 1 つ外国語を学ぼう」とオバマは訴えた。オバマは米大統領としては例外的にアジア言語を理解する逸材だ（インドネシア語で 4 年間初等教育を受けた。インドネシア訪問ではインドネシア語を話して聴衆を沸かせたが、アメリカ国内では政治的な事情からインドネシア語は「忘れた」ことになっており、回顧録でもそう記している)。

選挙戦での訴えは、英語だけで通用する世界に安穏とした「内向きアメリカ」への叱咤だった。だが、外交では指導者の家族の特定の外国への留学、言語学習は思わぬメッセージ性を伴う。例えば、大統領の子どもや夫人が揃って日本語を学び、日本に留学することなどを想像すればわかりやすい。その国際的な絆感の印象は圧倒的だ。

「外国語アピール」のジレンマ：外交・文化交流・移民社会

ビル・クリントンは回顧録で娘のチェルシーが外国語をサマーキャンプで学んでいたエピソードを披露している。ミネソタ州の施設で２～３週間のあいだ、グループごとに特定の言語だけで生活する。中国語や日本語も選択できたそうだが、チェルシーはドイツ語を選んだ。夏の恒例行事だったという（邦訳版『マイ・ライフ』上巻 688 頁）。

ドイツ語ならばさほど問題も起こりにくいのだが、多様性の代名詞のようなアジア文化は深入りするには複雑な問題もある。アメリカの「アジア太平洋諸島系」は、地域的、言語的、宗教的に雑多な出身地からの寄せ集めの「国勢調査用語」でしかない。とりわけ中華圏は多様だ。中国語は文字や方言に広範囲の多様性があり、それが少なからず現代の対立関係とも重なり政治的な含意も伴う。文字や方言や地域の歴史学習を並列して扱わないと、余計な意味を生じさせてしまう。

特に、移民社会アメリカの場合難しいのは、お膝元に大規模な中華系アメリカ人社会を長年抱えていて、ここでの主流が外交上の米中関係とは一致しないことだ。アメリカの政治家にとっての中国語の扱い方には、どの種の中国語を第二外国語教育の基準にするかといった日本での問題などとは、まるで異質の事情がある。中華系アメリカ人は歴史的に広東移民が源流かつ大多数で、映画やあるいはエスニックジョークを繰り出す中華系のコメディなどでも、長年「中国語」として浸透しているのは広東語である。台湾系拠点では北京語も浸透し、近年大都市では福州語など多様な方言も浸透しているが、北米のチャイナタウンは文字に関しては共通して繁体字を受け継いできた（ここ数年で急速に簡体字も浸透しつつある：拙著『メディアが動かすアメリカ―民主政治とジャーナリズム』）[3]。

移民社会の延長で海外を理解する傾向のあるアメリカでは、コミュニティの感情的にも、政治家の家族が移民の主流ではない方言や文字の学習をメディアで誇示することは、やや複雑な問題を引き起こす。「足元の中華系の伝統にもサーシャは目を向けて欲しかった」と、筆者と旧知のニューヨーク民主党の中華系の面々は寂しがっていた。オバマ周辺は良かれと思って「多

3. 渡辺将人「メディアの見えない地域性：デジタル時代の米中の事例から」『Journalism』2021 年 6 月号（朝日新聞社）

文化理解」を示したのに、予期せぬ落とし穴だったと政権関係者は吐露する。外国語を披露したり民族衣装を褒めたりという行為は、完全に偏りのない配慮は難しく、どこかに誤解を与えかねず、結果メリットよりもリスクが大きい。筆者もかつて従事したニューヨークの選挙の集票広報では、南アジア系の多言語に配慮していたら、広報物のデザインが翻訳例文集のようになった挙げ句、ヒンディー語とパンジャブ語とウルドゥー語とベンガル語の順番1つでも揉めに揉めた。

この手のことは外交では頻繁に起こる。例えば、アジアではベトナムでもモンゴルでも旧暦の正月が広範に祝われるが、表現には地域性がある。「春節」は中華圏特有、しかも大陸風で、香港では「農暦新年」、台湾でもやはり「農暦年」「舊暦年」などと表現する。日本では旧正月は祝わない。大掴みに「アジア系」に敬意を示す意図でこの種の表現を使う場合、域内文化に細かく照らせば思わぬ「優遇」と「冷遇」の政治的含みを持たせかねない。Chinese New Year か Lunar New Year（太陰暦）かの微妙なニュアンスも同様だ。一般ではそこまで神経質になる必要はない。だが、超大国の大統領家族であれば、そうはいかない窮屈さがある。

オバマの娘の中国語学習の話題自体は、当時多くの台湾人や香港人に、大統領の娘が中国語に関心を持ってくれて嬉しいと好意的に受け止められていた。一方、中国語教育を文化戦略の柱の1つにしている中国の動きは俊敏で、国営新華社通信系の映像メディアが、「オバマの娘も学ぶ中国語」として、アメリカでの北京語教育熱を学習者の若者へのインタビュー取材で大々的に報じていたこともある。誰かが進言したのか、オバマ家の中国語学習の話はその後あまりホワイトハウスから出てこなくなった。贅沢にも胡錦濤主席（当時）を相手にサーシャが中国語練習の胸を借りたという、あの微笑ましいエピソードは『約束の地』には記されていない。オバマがインドネシア語はもう忘れたと回顧録で繰り返し強調するのも、「文化」が不可避的にはらむ政治的含意の面倒さから距離を取りたい感情の発露かもしれない。

第 6 章

オバマにとっての北朝鮮と中国

オバマ回顧録論の 6 回目は、オバマ政権にとっての東アジア外交、北朝鮮と中国の問題を取り上げる。

「動かない難題」としての北朝鮮

オバマとトランプは政治に独特の嗅覚を持っていた。オバマが持っていたのは「動かないもの」を見分ける嗅覚で、トランプが持っていたのは「人が驚くもの」を見分ける嗅覚だ。

完璧主義者のオバマは結果主義でもあり、成果が出そうにない「ロングショット」の案件を頭から避ける傾向があった。これは内政においてもそうで、人種問題など大統領が先頭で介入すれば双方の対立がむしろ広がる案件には手を出さなかったし、医療保険制度改革もクリントン政権下でヒラリーが目指した皆保険よりも小規模の法案で、手堅く保険会社を味方につけた。

オバマが内政で、勝敗を度外視して感情剥き出しの勢いで打って出たのは、銃規制法案だけだった。コネチカット州の小学校乱射事件の際、オバマはそれまでに見たことない怒りの感情を示していたという。

外交でオバマが真っ先に距離を置いたのが北朝鮮だ。北朝鮮問題は動かない。動くときは突然事態が急展開するのだが、動いたと見せかけて、本質は動いていないことが多い。筆者が「米朝首脳会談再考と日朝の構図」[1] で詳述したように、ここ 20 年で言えば、現実的に事態が「進展」したのは 2002 年の小泉訪朝による拉致被害者の一部帰国から、ブッシュ（子）政権 2 期目の 6 カ国協議と米朝接近の頃までの数年程度に凝縮されている。

それ以降の時期はいずれも散発的な動きで根本的「進展」はない。部分を

1. 渡辺将人「米朝首脳会談再考と日朝の構図―ジョージ・W・ブッシュ政権期との比較から―」笹川平和財団『SPF アメリカ現状モニター論考』、2018 年 7 月 26 日、<https://www.spf.org/jpus-j/spf-america-monitor/spf-america-monitor-document-detail_7.html>（2021 年 6 月 3 日参照）。

見ると動いていても、20年のスパンでは2000年代前半の動きに比べれば微々たるものにとどまっている。当時、筆者が北京支局に増員特派員的に勤める羽目になったのも、6カ国協議があまりに長期化し、北京支局を拠点に北朝鮮を担当する要員として帰国不能になったためで、極めて異例な時期だった。

「政権遺産」への野心を掻き立てる北朝鮮の魔性

「政権の遺産（レガシー）」になる歴史を築けそうな、そんな匂いを発する魔性を北朝鮮は漂わせる。クリントン政権はオルブライト国務長官を訪朝させて接近し、ブッシュ政権はライス国務長官をけしかけて、一時は平和条約を視野に連絡事務所設置案までテーブルに載せた[2]。しかしいずれも成功していない。オバマ政権は過去の政権の経緯を冷静に勉強した。その上で、北朝鮮はリスクがあり過ぎると判断したのだ。その結果が、自らは何も仕掛けない「戦略的忍耐（strategic patience）」であり、危機が発生しない限りは「手をつけない」ということだった。

どの政権も末期に北朝鮮に手を出すのは、失敗したときのダメージが、再選や他の重要政策実現の資産を失わせるからだ。だが、政権末期に動き出してもどうせ「時間切れ」になる。早期に本気で手をつけるリスクを取れる政権でないと動かさない。しかし、そういう政権はなかなかないので動かないというスパイラルだった。左派の専門家までが、リスクを気にしない破天荒なトランプなら動かせるかもと期待したのはそのためだった。

だが、トランプは「成果を出す」ことではなく、「人が驚くもの」は何かを嗅ぎ分ける天才だった。そこで歴代の両党の政権が失敗し、オバマが8年棚上げした北朝鮮に目をつけた。ここまでは興味深い展開だった。しかし、目立つことが第一目標であるトランプは、その先のシナリオに弱かった。政権からその道数十年の外交専門家を排除していたことも負の作用をもたらした。華々しい米朝会談だけでやはり頓挫した。

オバマが回顧録刊行に時間をかけた理由をめぐる憶測の1つに、トランプ政権の北朝鮮のイニシアチブの成り行きを見届ける必要が生じてしまったと

2. 2018年、トランプ政権下での米朝首脳会談で話題化した米朝連絡事務所案だが、米国務省にとって調整経験はブッシュ政権期に遡る。2005年当時、ワシントンと東京の複数の日米外交筋への筆者確認に基づきテレビ東京で報じ、共同通信など一部社も同じく報じた件だが、米政府は調整過程の詳細は公にはしていない。

の説があるが、これは納得できる読みだ。

『約束の地』でも北朝鮮に単独で触れている箇所はなく、「北朝鮮が弾道ミサイルの発射テストを開始したとき、国連大使のスーザン・ライスは安全保障理事会に強力な国際制裁を採択させることができた」(下巻 180 頁)として、オバマ政権成立後のアメリカへの国際的な信頼増進に関連して述べているところがある程度で、北朝鮮の指導者の固有名詞も出てこない。日本の拉致問題への言及も残念ながらない。

オバマ独自の中国観？

ルーツ的には「太平洋大統領」だったオバマがアジア外交で力を発揮できなかったのは皮肉だし、中国の覇権主義を黙認し、北朝鮮を事実上放置する８年になったことへの批判は小さくない。だが、「内政優先」政権の大方針に加え、全てを見通せてしまうオバマのバランス感覚も裏目に出た感がある。

中国についてオバマの考え方は曖昧模糊としている。オバマは回顧録での中国関連の記述で、1970 年代以降の中国史を彼なりに概括し、意外なことに「アメリカ政府の甘い対応」を批判的に振り返ることから始める。

「1990 年代前半、労働組織のリーダーたちはますます公正さを欠いていく中国の貿易慣行について警鐘を鳴らしていたが、かなりの数の民主党議員――特に工業が斜陽化している州選出の議員が、中国を擁護したのだ。共和党にも中国を批判する者はいたが、そうした人々は、アメリカが少しずつ他国に降伏しつつあると考えて怒りを募らせるパット・ブキャナンタイプのポピュリストか、邪悪な共産主義の拡大をいまだ懸念する高齢の冷戦タカ派のどちらかだった」(下巻 215 頁)

民主党から共和党まで、アメリカの対中政策の各流派を解説して見せた上で「中国についての私自身の見解は、どのグループの見方ともぴったりとは重ならなかった」と述べる。つまり、両党の先輩政治家や、アメリカの並居るアジア専門家の研究者や外交エリートをばっさりと切り捨て、自分の中国観は違うと言うのだ。

「世界経済への統合を中国に促したクリントンとブッシュの決断は正し

かった」と両政権を肯定した上で、民主党の足元の労働組合の自由貿易に対する拒絶反応を諫める。他方で、「米中間の貿易不均衡が巨大化した現場では、アメリカはもはや中国の為替操作やその他の不公正なやり方を見過ごすことはできない」との考えを示す（回顧録に記されているオバマの温家宝首相への発言）。

金融危機の後始末を背負わされたオバマは、経済的な実利主義から中国との衝突を避けたことを回顧録でこう記す。

「中国は 7,000 億ドルを超える米国債を保有し、外貨準備も巨大だったために金融危機管理において必要なパートナーになっていた」

「貿易戦争が始まって、世界中を不況に陥らせたり、私が支援すると誓った労働者たちがダメージを被ったりするような事態にしてはならない」（下巻 216 頁）

オバマはインドネシアでの経験、シカゴ南部での活動を通して、貧困がこの世で最悪のものだと考えるようになった。『約束の地』でも「何億もの人々を極度の貧困から救った中国の成功は、人類のすばらしい偉業だと思えた」と記している。だが、政治的な公正さや自由を棚上げしたまま格差を広げる経済発展をどう考えるのか、オバマはそこには答えを示していない。

オバマ流レトリックによる中国批判

「作家オバマ」は中国論でも得意の持って回ったレトリックを駆使している。「誉めて、落とす」という例の「オバマ節」に注意していれば、決してオバマが中国に一方的に甘いわけではないことはわかる。しかし、カモフラージュが複雑でストレートに揶揄が響かない。「安全運転」の批判だ。

「封建主義から情報化に至るまであらゆる性質が入り混じる経済を統合しながら、北米と南米の両大陸を合わせた規模の人口の需要を満たすだけの雇用を生み出さなければならない」と、中国の指導者の立場に同情を示す努力をしたかと思えば、「共産党の高官たちが、常習的に国有企業との契約や営業免許を自分の親族に与え、数十億ドルを外国の口座に蓄財しているということを知らなければ、もっと共感できた」と皮肉を込める（下巻 225 頁）。

北京での公式晩餐会でのシーンの回顧の仕方も特徴的だ。「晩餐会では中国の伝統芸能である京劇なども上演された」と記した上で、「チベット族、ウイグル族、モンゴル族のグループによる舞踏メドレー」も行われたことに触れるのだが、「司会者は、中国ではすべての少数民族が尊重されていると言った。参考までにといった雰囲気で述べられたその言葉を、政治犯として服役する数千人のチベット族とウイグル族が聞いたらさぞや驚いただろう」と締めくくる（下巻 225 頁）。

上海で現地の大学生と対話した 1 シーンが出てくる。「学生たちは礼儀正しく熱意もあった」としながらも、「若い彼らは、文化大革命の恐怖を体験したこともなければ、天安門広場での弾圧をその目で見てもいない。そういった歴史は学校で教えられず、親からも聞いていないのではないかと思った」とチクリと刺す。オバマは若者の愛国心が「うわべだけというわけではない」と今から 10 年以上前の対話に感じ取っていた。

その上で「中国の学生たちの考えはいずれ変化するだろうと考えたかった。しかし、そのような変化が訪れる保証はない」と悲観論を提示し、それは「中国の経済的成功により、その権威主義的資本主義というシステム」が、「あらゆる発展途上国の若者にとって、欧米式の自由主義に代わる有望な体制に見えていた」ことにあると述べる。オバマは「彼らが最終的にどちらの体制を選ぶかによって、次の世紀の地政学が大きく変わるだろう」と指摘する（下巻 222-223 頁）。

極めて妥当ではあるが、このメッセージはあまりに傍観者的に聞こえるかもしれない。「自由主義一択」とオバマは叫ばないのである。

「対中認識の変化」以前を描くオバマ回顧録

回顧録を熟読すれば、オバマが中国の強さと同時に負の面も認識していることは自明だ。だが、それを正面からは主張しないのもオバマ流である。皮肉めいた言い回しでオブラートに包んで表現する。作家としては上級の批判手法かもしれない。しかし、大統領としての外交上の結果責任はどうか。そのジャッジを『約束の地』という回顧録前篇だけで下すのはフェアではないだろう。オバマ政権の対中政策もオバマ政権末期に硬化していくからだ。TPP（環太平洋経済連携協定）をオバマが明確に対中包囲網と意識していた

ことは、バーニー・サンダースが後に明かしている。

慶應義塾大学の中山俊宏教授は、トランプ政権以後、バイデン政権でも一貫して厳しいアメリカの対中姿勢について、「アメリカ人の意識の中で中国の存在が大きく変わったことの結果」と指摘する。

1970年代初頭以来の、対中関与政策の挫折でもあった。それは、中国を国際社会に引き出すという姿勢で関与していけば、中国もいずれは「こっち側」にきて、「責任あるステークホルダー」になるという期待をもはや持てなくなったということである。

この対中認識の変化は超党派的なものであった。なにか単一のトリガー・イベントがあったわけではないが、この変化は2010年代半ばあたりからはっきりと確認できるようになった[3]。

周知の通り、2010年代に中国はサイバー技術を含むテクノロジーの進歩と覇権主義を加速させた。2009年の米中会談で温家宝首相が自虐を巧妙に駆使した以下のような言い訳を披露していたことをオバマは回顧録で明かすのだが、それはある種のノスタルジーも醸し出す。

『これはわかってください、大統領。上海と北京の繁栄をご覧になったかもしれませんが、中国はいまだに発展途上国です。人口の三分の一、つまりアメリカの全人口より多くの者たちが依然として深刻な貧困状態にあります。高度に発展したアメリカ経済に適用されるのと同じ政策を中国が採用するとは期待しないでください』（下巻224頁）

上記の中山教授の分析を敷衍すれば、オバマが就任した当時の胡錦濤の中国に対するオバマの中国観が、習近平の中国に移行していく過程でどう変化していくのかが「見もの」であり、そればかりは回顧録の後篇「オバマ政権２期目」を待たねばならない。その意味で、『約束の地』におけるオバマの中国論は未完である。

3. 中山俊宏「【解説】見えてきたバイデン外交の輪郭…もう『トランプおやびん』はいない」FNNプライムオンライン、2021年3月29日、<https://www.fnn.jp/articles/-/161717>（2021年6月3日参照）。

第 7 章
トランプとバイデンについて

オバマ回顧録論の 7 回目（最終回）は、オバマ時代が残したポピュリズムの種とトランプとバイデンへのオバマの評価を考察する。

オバマ政権が終わろうという頃、筆者は同政権の高官らに網羅的に会って政権への自己評価を聞いて回ったことがある。最大の成果は外交ではなく内政、とりわけ医療保険改革法という点で一致していたが、興味深い意見に以下のようなものがあった。ある黒人の高官は、オバマについての最大の誤解は「元々は左派だったのに中道化してしまった、という落胆」と述べた。

「オバマは最初から穏健だった。景気刺激策もあの 2 倍は必要だったのを 8,000 億ドル程のみに留めた。サブプライムローン問題でも、住宅所有者にツケを払わせてウォール街規制には腰が引けた。彼はラディカル（急進的）でもなんでもない。でも、人は彼が穏健だと思わない」

オバマへの「誤解」は選挙戦、特に民主党予備選では有利だった。オバマはアフガニスタン戦争には賛成していると回顧録でも改めて明言しているし、ドローン攻撃も多用したが、イラク戦争に反対したことで就任時は「反戦主義者」の雰囲気を漂わせた。政治メディアもオバマを左派議員と評定しがちだったが、願望に基づく「誘導」圧力からの報道も多分にあった。オバマの曖昧な穏健さは、右からは「ラディカル」だと誤解され、左からは「ラディカルさが足りない」と突き上げられる運命を背負い込んだ。この両極の感情が左右双方にポピュリズムを生み出すオバマ時代の下地を築いたと言える。

内部の敵としての左派への嫌悪感？

トランプ政権との相対評価で忘れられがちだが、もっとも辛辣なオバマ批判は、保守派ではなく、足元の左派から繰りだされた。オバマ政権は左派を幻滅させた政権だった。左のポピュリズムは枚挙にいとまがない。ブラック・ライブズ・マター（BLM）運動は、「本当に黒人の味方なのか」という黒人たちのオバマへの期待の裏返しの疑念と失望の感情から、2013 年（オバマ

政権 2 期目序盤）に始動したものだ。「反トランプ」で生まれたものではない。BLM だけでなく、「ウォール街占拠」運動、バーニー・サンダース旋風など急進左派的な運動は、いずれもオバマ時代の産物だ。ただ、これらの左派ポピュリズムは 2011 年秋以降の「ウォール街占拠」運動以外は 2 期目に発生したもので、今回の回顧録前篇である『約束の地』の射程外である。サンダースへの言及も皆無だ。

冒頭で紹介した元高官が筆者に明かすように、オバマは超党派路線を目指した。それに対して、共和党との政争を目的化する議会民主党は、オバマの姿勢が「十分に党派的でない」と反発した。黒人、左派を次々と幻滅させたオバマの敵は「内部」にいたと言える。その苦悩の吐露は切実だ。

〝オバマの戦争〟をやめろと呼びかけるプラカードを掲げる抗議者、不法就労者の強制送還を続けるオバマ政権を批判するヒスパニック、軍で性的指向を隠すことを強いる原則を批判する LGBTQ の活動家、オバマの人種的に煮え切らない態度に幻滅する黒人スタッフ、中道的な妥協に憤るリベラル派議員――。彼らの怒りが次々と飛び出す。だが、オバマの左派への懺悔録と思いきや、そこには左派の攻撃を切り捨てるオバマの本性も垣間見える。

ところで、ポピュリズムとの関連で言えば、回顧録の中で、ネット選挙運動にオバマが否定的な中間評価を下していることは見過ごせない。オンライン選挙運動を広めた張本人で、その力で草の根の支援を受けたオバマは次のように述べる。

「だが、こうしたテクノロジーはその後、当時の私の理解を超える柔軟性や応用性を示し、またたく間に商業的利益に取り込まれ、既存権力層に利用されるようになっていった。さらに、人々を調和させるためでなく、惑わしたり分断したりするために使うことも簡単にできた。私をホワイトハウスにたどり着かせたツールの多くが、私が支持するすべてのものに対立する形で使われる日がくることを、私は想像できていなかった」（上巻 216 頁）

いうまでもなく、ティーパーティ運動のオンラインでの広がりであり、SNS 利用大統領であるトランプ政権への誕生がここでは示唆されている。

ティーパーティ運動とトランプ

オバマ政権下における右のポピュリズムの代表例はティーパーティ運動だった[1]。そこに反移民運動、保護主義、キリスト教保守などが結合し、トランプ旋風を巻き起こした。筆者が『約束の地』で驚いたのは、オバマがティーパーティ運動にかなりの字数を割いて詳細に回顧していることだった。その書き込みは、運動の呼びかけの契機となったCNBCのコメンテーターであるリック・サンテリの叫びにまで及ぶ。本来は大統領回顧録でわざわざ触れるような人物ではない。オバマはティーパーティ運動を焚きつけたサンテリに政権が要警戒の目を向けていたことを振り返る。（ヘリテージ財団がYouTubeにアップロードしている当時のサンテリの叫びはこちらからご覧いただけます→ https://www.youtube.com/watch?v=zp-Jw-5Kx8k）

「ロバート・ギブズから、CNBCのビジネスコメンテーターであるリック・サンテリが住宅ローンの救済策についてテレビで大演説をぶったと聞かされた。ギブズは心配しているようだった。この手のことでギブズの勘が外れることはめったにない。『すごく話題になっています』とギブズは言った。『記者団にも感想を求められました。ご覧になったほうがいいと思います』夜になって私はそのビデオクリップをノートパソコンで観た」（上巻430頁）

大統領が自らノートパソコンでビデオクリップを視聴するという行為は興味深い（CNBCのサイトなのか第三者がアップロードした動画サイトのものかは不明だが）。オバマは「サンテリの動画をしばしば思い返した」（上巻433頁）と述べ、「小さな政府」を求める保守系の運動に一定の理解を示す。オバマの医療保険改革に反対するティーパーティ運動は大富豪のコーク兄弟が出資する人工的運動だとの疑いもあった。だが、オバマは以下のようにこの運動を総括する。

「とはいえ、ティーパーティが共和党内におけるポピュリスト的うねりを真に体現するものであったことは否定できない。この運動はたしかに、草の根的な熱意と荒々しい怒りに駆られた真の信奉者たちによって構成されていた（中略）そうした怒りの一部は、向ける方向性こそ誤っていると思うが、私にも理解できる」（下巻113頁）

1. ティーパーティについては以下を参照のこと。久保文明・東京財団「現代アメリカ」プロジェクト編著『ティーパーティ運動の研究』NTT出版、2012年。

そしてオバマは「ティーパーティ運動に惹かれる白人の労働者階級」と何の対策もうってくれない共和党とブッシュ政権への怒りと不満が根底にあるとして、トランプ現象の萌芽まで解説してみせる。しかし、ティーパーティは、黎明期はロン・ポール議員が駆動した反ウォール街救済のリバタリアン運動で、参加者には富裕層も少なくなかった。次第に運動に文化保守的な労働者層が参入し、運動初期の自由貿易派のリバタリアンとは袂を分かち、後発組の文化保守的な保護貿易派がティーパーティをある種乗っ取り、ティーパーティを名乗り続けた。このやや複雑だが大切な経緯がオバマ回顧録では省かれている。オバマにとってここで重要なのは、ティーパーティ運動とトランプ支持者を重複させ、「抵抗勢力」誕生を1つの線で描くことだからだ。

『約束の地』にはトランプ前大統領の「影」が覆う。末尾で取ってつけたようにトランプ論が出てくるのも特徴的だ（下巻486-491頁）。オバマ政権の成果をひっくり返す存在にオバマの筆は相当に翻弄されている。しかし、トランプについてオバマは「猛攻撃」を加えていない。オバマがアメリカ生まれではないとの陰謀論の「バーサー」運動をトランプが主導したことは批判しつつも、オバマ政権の最初の2年をトランプが「全体的に見てなかなかいい仕事をしていると思う」と評価していた逸話も紹介する（下巻488頁）。オバマがここでさりげなく行っているのはトランプの無党派性の強調である。オバマはトランプを保守政治家、共和党の重鎮としては認めない。存在をさほど気に留めていなかったという態度を貫く。

そして、トランプを面白がって熱心に報道した米メディアを批判する。特に苛立っていたのは夫人のミシェルだった。「ミシェルは、トランプやこの男との共生関係にあるメディアのことを考えるだけで激怒した」（下巻490頁）。

バイデンの見えない役割とクリントン派の影

一方、『約束の地』でのバイデンへの言及は実に少ない。オバマとバイデンの不仲説はワシントンでは有名な話で、2012年再選選挙前にはバイデンが下ろされて、ヒラリーが副大統領候補になるとの噂も広まったこともある。

そもそも副大統領の権限は少ない。だから本書にバイデンの「活躍」が一切出てこないのも致し方ない面はある。大統領選挙本選までは対等のコンビのように演じさせられ、いざ実際に政権が始動すると、大統領は補佐官や顧

問などの側近で固め、情報も遮断されるのが常だ。ブッシュ（子）政権で「裏大統領」のような権勢を振るったチェイニーは極めて例外的だった。

また、バイデンが思いがけず大統領になってしまったことが、回顧録に与えた影響は小さくない。オバマにとっては「元部下」というよりも、歴代の大統領として歴史的に評価される「対等なライバル」になってしまった。バイデンのオバマ政権時代での行動を好意的に書けば、バイデンへの読者の高評価と連動し、バイデン政権を輝かせる。それがオバマ政権の再評価につながる好循環なら良いが、オバマが挫折した課題でバイデンが成果を出したら、オバマの評価を傷つける。褒めるにしても筆が躍りすぎると、逆にバイデン政権の成果が伸び悩んだときにオバマの人物評価や政治予測の鈍さを露呈してしまう。どちらに転んでも、現在進行形の後続政権の顔になってしまった元部下のかつての勤務評定を公にすることは、人事考査を行う上司の目の曇りも先見の明も浮き彫りにする。いっそ評価を留保してバイデンにはあまり触れないのが「安全策」だったとしても十分に理解できる。

2020 年、本書の仕上げの時点でバイデンが民主党予備選でどこまで到達していたかは不明だが、バイデンへの書き込みが最終段階で「調整対象」になった可能性は十分に窺える。回顧録後篇の刊行までにバイデン政権に成果が出ていれば、その成果をオバマ政権が土台を作ったかのように描けるかが後篇の勝負になってくる。こうなると後続政権の様子を見ながら書き方を変えられる回顧録の出し方はアンフェアだという感想も出るだろう。しかし究極的には、回顧録とは歴史的事実を逸脱しない範囲で行う政治的ブランディング戦であることをオバマ回顧録がはからずも教えてくれているとも言える。

オバマが回顧録でバイデンについて正直に明かしていることで興味深いのは、2008 年大統領選挙で副大統領候補をバイデンに依頼した際、バイデンに断られた事実だ。「彼も健全なエゴの持ち主で、ナンバー 2 に甘んじることを嫌ったからだ」と説明する。だが、オバマはバイデンの「発言に遠慮や配慮がない」問題など欠点を挙げつつも、外交政策での経験、連邦議員とのパイプを賛美し、交通事故で妻と娘を失い、再婚して家族を支えてきた物語など逆境に強い性質、そして人柄に感銘を受けたことを記している（上巻 266-267 頁）。

バイデンの目立たないものの貴重な役割が光るのは、政権内での建設的な異論提起役を引き受けていた事実だ。回顧録半ばに出てくる、軍が就任したばかりのオバマにアフガニスタンへの増派を要請する会議のシーンで、バイデンだけが唯一増派に懸念を発する場面がある。オバマはこのバイデンの発言で決断への時間の猶予を得る。これはバイデンなりの作戦だった。

「軍の計画に突っ込んだ質問をすることで、ジョーは私を助けてくれていたのだと思う。少なくとも部屋に1人、反対の意見を主張する人間がいることで、私たちは問題について深く考えるようになった。そして、その反対意見を出すのが私ではないほうが、周りの人間は少しばかり自分の意見を言いやすくなる」（上巻500頁）

ところで、トランプとオバマの「アウトサイダー」としての類似性と比べれば、エスタブリッシュメントのバイデンはむしろヒラリーと同種の政治家で、民主党内ではオバマ派ではなくクリントン派のスタッフを多く抱える。ヒラリー最側近のサリバン国家安全保障担当補佐官のほか、やはりクリントン派でオバマ側近集団に「外様」扱いされていたラーム・エマニュエル元シカゴ市長の駐日大使指名の意向など、バイデンはクリントン夫妻派の登用を躊躇しない。この辺りには民主党内のオバマ・クリントンの骨肉の12年戦争が代理戦の形で反映されていて興味深い。オバマはエマニュエルの首席補佐官登用時の側近の拒否反応を回顧録に赤裸々に記す。

「ラームはヒラリー・クリントンを支持していたではないか、と不満をこぼす者も少しいた。彼のことを、右派にも左派にもおべっかを使い、ダボス会議に出席するたぐいのエリートで、金融業界に甘く、ワシントン政界に重きを置き、中道に偏執する古いタイプの民主党議員とみなす者もいた」（上巻336頁）

今回のエマニュエル駐日本大使指名案にも左派から反発が示されている。だが、エマニュエルを政界で数十年知るシカゴ政界の重鎮は筆者にこう語る。「日本にとってはラーム（エマニュエル）がいい。彼ならバイデン大統領に直接アクセスできる」。元オバマ政権内の隠れクリントン派にして米政界随一の寝技師は、敵にまわせば厄介だが、味方につけると心強いタイプの豪腕政治家である。日本に迎えるとなれば、オバマ回顧録に豊富に盛り込まれている同氏に関する記述は改めて要参照と言えるだろう。

回顧録前篇の『約束の地』は 2011 年 5 月のビン・ラディン殺害のシーンで終わる。しかしこれは、オバマにとっては、必ずしも対テロを主眼にした「外交政策」ではなかった。

「私には、ビン・ラディン追跡を重視する明白な理由があった。この男が自由を満喫している限り、9・11 で命を失った人々の家族の心痛は消えず、アメリカが侮辱され続けることになるからだ」（下巻 494 頁）

オバマはアメリカの内側に向かってビン・ラディン掃討を行っていた。オバマ政権は徹頭徹尾、内政中心主義だったが、それはトランプ政権とのもう１つの意外な共通項でもあった。

繰り返し述べてきたように、これだけ長い期間をかけて時間差で分冊発行される大統領回顧録には優れた点とマイナス点が併存する。大統領が 8 年の任期を終えた直後の成果と失敗への率直な感想を読みたかったという世界の読者も少なくないだろう。後続政権２つ目に突入している今、オバマが書いているのはもはや政権終了直後の素直な感想ではない。トランプ元大統領の今後の言動（トランプ回顧録）、バイデン政権の動向に否応なしに影響される「同時代進行型」の回顧録だ。だが、自政権の遺産を後続政権から照らす、ある種の比較論としては、純粋な従来型の大統領回顧録の枠にはまらないオバマらしい実験の書である。それだけに後篇が姿を現すまでは総合的な評価が難しい、異色の作品だ。

（了）

SPF アメリカ現状モニター

「オバマ回顧録論」

著者：渡辺将人（北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院 准教授）

発行者：公益財団法人笹川平和財団
〒105-8524 東京都港区虎ノ門 1-15-16 笹川平和財団ビル
ＴＥＬ：03-5157-5140　|　URL：https://www.spf.org
Email：japan-us@spf.or.jp（日米グループ）
発 行：2021 年 11 月
無断転載を禁じます。

SPF 笹川平和財団
SASAKAWA PEACE FOUNDATION